
正し屋本舗へおいでなさい

剣岳 鳳哉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正し屋本舗へおいでなさい

【Zコード】

Z0334Y

【作者名】

剣岳 鳳哉。

【あらすじ】

就職活動をしていた江戸川 優は、ベタな出会いから「正し屋本舗」という少し特殊な職場へ就職した。「正し屋」の仕事は依頼人が持ち込む依頼を解決すること。

優はここで雑用兼見習いとして癖が強すぎる上司に弄られながら、妖怪や幽霊といったかなり特殊な仕事に向き合っていく。
癒し成分はもっぱらペット(?)の雀と狛犬たち。色気より食い気な主人公は甘味好き。

あつきたりとこわないで（前書き）

誤字脱字には十分注意しているつもりですが、もし誤字脱字などがありましたら報告していただけないと幸いです。

あまり描きなれていないので色々と読みにくいくらいもあるかもしれませんが、精進していきたいと思っています。
暇つぶしにでも読んでいただけると嬉しいです。

ありきたりといわぬいで

慣れない重さと大きさのビジネスバッグが、私に現実を突きつける。

手に持っているビジネスバッグは男の人用なので持ち手のところが凄く持ちにくい。

ビジネスバッグはケチらないで新しいの買えばよかつたって何度も思つたことか！

でも最大の敵はビジネスバッグじゃなくて、ヒールだ。

ヒールなんて履きなれてない所為で、叫んで「ゴロゴロ転がりまわりたいくらいきつい。

足全体の痛みがそろそろ無視できない状況になりつつある。

しかもそこに天敵である、動きにぐぐって快適でとは無縁のスース
が加わるんだから恐ろしい。

色が黒いから太陽の光は吸収するし辛いのなんのって。

移動するときは普通の靴とジーパン、着替えやすい恰好のほうが
いいかも。

会社の近くに来たら着替えればいいよね。

げんなりと人が行き交う街中でうなだれている私の名前は江戸川
優といいます。

某眼鏡の少年とは何の関係もない、しがない田舎者ですとも。

これだから都会は、なんてぶつくさ八つ当たり氣味に呴きながら立
ち止まつて天を仰ぐ。

「（ううあ……なにこれ、凄くあつづいんだけど）

ビルの隙間から見える雲一つない快晴は、今の私にとつては泣きた
くなるくらい憎いあんちきしじうだ。

体中が水分を要求してゐる。特に喉とか口の中とか。
乾物の気持ちがわかる一歩手前つてところかなあ。

「（にしても、完全に就職活動を悔つてた）」

友達から就職活動が大変だと聞いてはいたけれど、まさかこじま
でとは。

あんまり器用なほうじゃないから勉強と就活と一緒にやる自信がな
くて勉強を優先してたんだけど話だけでも聞いておくんだった。

次々に就職を決めていく友人たちに焦り始めたのは5日前。
まずは就職を支援している短大の就職課や公共機関を利用したんだ
けど、結果は　　言つまでもない。
受かつてれば、今こんな恰好してないもん。

「（ここのは絶対大丈夫って言つてた就職課のおばさんが最後には神
社でお祓いを受けてきなさい、だもん。ついてない以前の問題だよ
ね……面接練習だつて一発だつたのに）」

はあ、と盛大なため息と一緒に肩が下がる。

うつ。朝から歩きっぱなしだった所為で足は重いし、何十社も会社
回つたけど全部落とされるし、本気で一回お祓い受けてこようかな
あ……？

「そりいえば、お昼ご飯もまだだつけ」

気づいてしまえば物凄く何か食べたくなってきた。

美味しいミートソースのパスタでもいいし、野菜とキクラゲが入ったラーメンも捨てがたい。

ああ、ハンバーグとかもいいなあ。

脳裏をよぎるお昼ご飯候補につつかりよだれをたらしそうになつた。危ない危ない。

今にも泣きだしそうなお腹を二、三回撫でてから気合を入れなおす。

（田標！食べ物のあるお店！田指せ！安い・美味しい・早い……ついでに美味しいデザートがあると文句なしの追加点！…）

えいえいおーーと心の中で自分を叱咤激励？して、棒切れを通り越して電柱のようになつた足に鞭を打つて歩き出す。

でも、うん……現実つてやつぱり甘くない。

そんなの親が事故に巻き込まれて死んだり、テストで山を張つてたのに外した時とかに思い知つたけどね。中学生、高校生、大学と何度、数学のあんちくしょーに泣かされたかツ！！

数学なんてヤマが当たらない限りビーにもならないよ。

「（せつかく、色々応援してもらつたのに……なんで私つて要領悪いっていうか頭悪いんだろ）」

高いビルや無機質な色のコンクリートに囲まれた、息苦しい灰色のジャングルで飲食店を見つけるのはとても難しい。

ビジネスバッグの中には地図なんてない。

目標の会社にはタクシーの運転手さんやらおしゃべり好きのおばさま方に教えておらつてどうにかたどり着けていたんだけど……周りには忙しそうに速足で歩くビジネスマンやらビジネスウーマンしか見当たらない。せめて、コンビニがあればいいんだけど、コンビニがありそうな雰囲気はまるでない。

「前途多難すがる……」「、もつとじつかりしないとなあ」

脳裏をよぎるのは数々のネタ、もとい失敗談。

昔から抜けてるせいで普通の人はしないらしい失敗が多くった。友達はそんな私を心配したりどうしようもないなーなんて言いながらも色々手伝ってくれたんだよね。

私が言えれば皆がすぐしっかりしてるだけだと思つんだけど。

「（応援してもらつてるんだもん、頑張らないと）」

大丈夫、私はついてる！

特に人間関係は、うん、ついてる。他は色々不足してるかもしねないけど。

にしても、難儀な世の中だなあ。

友達には恵まれてるし、親が亡くなつたとはいっても祖父母がちゃんと育てくれた。

今はもう育ての親の祖父母も亡くなつたけど、高校の先生が凄く姉御肌？で色々アドバイスや手続きをしてくれたから大学にだつて行けた。……奨学金という名の借金はあるけど、仕方ない。

他にも近所の人にもよくしてもらえていたのに、私は何も返せないまま就職すらままならないこの現実。

うう、ホント申し訳ない。

「（学生の時はそれなりに大変だつたけど、楽しかったなあ。うう、すっごく戻りたい）」

大きな大きなため息を吐いて、足元に置いていた鞄を手に取つた。何だか私を追い越していく人たちが皆、すいすいと前に進んでいくような感覚に陥つた。

自分なりに“止まつてはいけない”と思つて足を前に動かし続けてみても、結局は止まつたままで。

つて、うわー……私、今まで人様に迷惑しかかけてないような気がしてきた。

「ハローワークに通うより新しい求人誌買つて特攻した方が確実かも」

鞆から取り出した求人雑誌を握りしめる。

表紙にでかでかと書かれている煽り文句が、ものすごく憎たらしい。雑誌からしたらとんだハッ当たりなんだろうけれど、それにしたつて“これで決まり！”なんてと軽々と表紙に書くものじゃないと思うんだよねッ！

ぐぬぬぬ、編集者に会う機会があつたら絶対ゼーったい！

「（私が総理大臣並みに偉くなつたら文句言つてやる！）ふ、ふふふふ……！」

暑さと疲労と空腹のトリプルダメージで思考が普段以上に支離滅裂になつてる気がするけど、もう知らない。

大体なんでビルばっかりなの！喫茶店の一件くらいあつてもバチはあたらないとおもう！

（）の時の私がもうちょっと冷静だつたら、人が行き交う道のど真ん中で拳を握りしめて笑うなんてしなかつたんだけどね。要反省だね、うん。毎回学習しないけど！

太陽光でジリジリ焼かれていた私を現実に引き戻したのは全身に
感じた衝撃。

手が、熱い。

小さくて硬い何かが掌に刺さつて地味に痛いのと、何故か凄く熱い。
あと体に感じる異常は、お尻がジンジンして……やっぱり痛いって
ことくらいだ。

えーと、もしかして私、電柱か看板にぶつかつた？

チラチラと周りの人たちが尻餅をついてるらしい私と正面にある“
何か固いもの”へ向かっていた。

勿論、周りなんてまるで見えていなかった。

数秒経つてから自分が尻餅をついた無様な格好でポカンと口を開けていることを自覚する。

「（あれ、もしかして私つてば今、民衆の面前で間抜けにも尻餅ついてる…？）」

じわじわこみ上げる羞恥心と闘いながら恐る恐る周囲を見渡す。つい先ほどまで私のことなんて眼中にもなかつたように歩いていた人達がチラチラ視線を送っていました。

でも、その対象は私ではないらしい。

全くじやないけど私のことはちらつと視界に收めてすぐに別のモノへ向けられている。

だって、視線が地面に座り込んでる私に向いてないので。

「（なんか、ずいぶん大きかつたしもしかして看板とか電柱にぶつかつた？）」

恐らく私が激突したのは大きなものだ。

それが看板や電柱でないことを祈りながら天を仰ぐ。

顔を上げた私は、こつしてベタで使い古された感じの出会いを
果たしてしまったのである。

あつきたりといわないで（後書き）

最後まで読んでくださつてありがとうございます！

次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

食いしん坊といわないで（前書き）

個人的に実際に会つて一番困るタイプ＝美形。

絶対にいたたまれない。穴掘つて隠れたい。

食いしん坊といわないで

結論から言おう。

ぶつかつたのは人間だった。

思わずヒクリと口元がひきつる。

あっけなく地面と仲良くなつた私の目の前にあつたのは、電柱でも看板でもなかつた。

アスファルト越しに伝わつてくる熱と尻餅をついた時にぶつけたらしいお尻が、残念ながらこれが現実であることを教えてくれている。

ぶつかっやけ、有難迷惑だったりするんだけどね！

「（顔、あげるんじゃなかつた………）」

後悔しても後の祭りだつてことは、さすがの私でもわかつたよ。

だつて、相手がわざわざ畠んでるんだもんね！

……あの私なんて路肩の石じろだとでも思つて、華麗にスルーしてくれると非常に助かるんですけど。

これが言えたらどんないいことか。

ちらつと差し出された手から周囲に視線を向けると、速足に歩いていたはずの人たちが好奇心丸出しで私に注目してる。足を止めてるのは女性が多いのは、たぶん私がぶつかった人の所為だ。

ビーしてくれる、ひとつ恥ずかしいよー

眩暈に似た症状を覚えて、とりあえず頭をぶんぶん振つてみた。
少しすつきりしたけど、やつぱり注目されるのって好きじゃないな
——なんか変な汗が凄いよ。

とりあえず、いつまでも座つている訳にはいかない。
それにせつから目が合つてるような気がするんだよねー。
逆光で見えないんだけど、眼鏡がキラめいてるし、空氣も心なしか
キラめいてる。
たぶん、これが美形オーラつてやつだ。だって自慢の女友達もこんなキラキラしたオーラまとつてるもん！

……それで、心の奥底にあつた「もしかしたら、強面のおじさんかもしけない」という怖すぎる脳内候補は消された。むむむ、美人のお姉さんだつたらいいんだけど、シルエットからして男の人だしなあ。

「すみません、大丈夫でしたか？」

頭は一応働いてたけど、間抜けにも口を開けたまま固まっている
私に何かが差し出される。

とりあえず、ティッシュじゃないことだけは確かだ。

「どうか怪我でもしましたか？ でしたら、病院へ…

」

「だ、だだだ大丈夫です！ なんのつ、なんつの問題もないです！」

差し出されたのはティッシュなんかじゃなくって、綺麗な手だった。

一瞬、この人は手のモデルでもやつてるんだろうかと思つたけれど、そうではなさそうだ。

声や物腰の柔らかさからして……お、おじさんのほうが良かつたかもしれないなあ！！

「ぐり、と思わず生睡を飲んで身構えた私の脳裏によぎる一抹の不安。

「（ま、まずいよね、これ！じ、事務所の人とかファンの人に殺されるんじゃないだろうか）」

個人的に期待するのは、キラキラオーラは持つてるけど顔は普通の好青年だよ！みたいなオチ。

大概は、そうなってる筈だ。

街中に美形がゴロゴロしてる筈がない。女の子やら女の人は美人さんとか可愛い子率は高いけど、男の人ってそんなにレベル高い人いないつて相場は決まってるらしい。

「… そう、ですか。では、ここは人目がありま
すし、ぶつかったお詫びをするなら落ち着いて話せる場所の方がいいでしょ。荷物はこれだけですか？」

「荷物はそのバッグだけですけど……え？！」、この近くに食べ物屋さんあるんですか！？」

「喫茶店ならありますよ。見つけにくいうるにあるので、普通に歩いているだけではたどり着けない筈です。随分、歩いたみたいですね」

差し出された手をひっこめてもらつて、私は自分で立ち上がつた。
知らない、しかもキラキラオーラをまつた男の人の手を握つて立ち上がれる度胸なんて微塵もない。
後で握手料とか請求されても困るし。

目の前の人には、落ちていた鞄を拾つて服をたたいている私に差し出してくれた。

ついでに、握りしめた所為でよれよれになつた求人雑誌も、渡してくれたんだけど……その時に私は初めて相手の顔をしつかりとみた。

「（うん、見なきやよかつたなーアンタいる場所間違ってるよー！スマジオへ戻れ！ハウスつー）」

もちろん、口になんてだせやしない。

出した瞬間に私はこの世に命を受けたことを後悔する羽目になると
思ったから。

首謀者？そんなのファンの人たちに決まってんじゃないですか。

だれだよ、こんな眼鏡美人連れてきたのー！

街中に不釣り合いなどんでも美形連れてこないでよ神様！凄くいた
たまれないよ！

生まれての方、普通くらいの容姿で生きてきた私にはかなりひどい
仕打ちすぎる。

私はこの人がテレビやら雑誌やらに出てても驚きはしないね、う

ん。

「そ、そうなんです！結構歩いて疲れちゃつたのでもう家に帰るう
かなーって思つてたところなんですよ。だから、お詫びとか全力で
大丈夫なので、どうぞお気になさらず目的を果たしてください。こ
ちらこそ、その、本当に失礼しました。今度から車と電柱と自転車、
ついでに道行く人には気を付けます」

「そうですね、配慮に欠けていました。歩き通しでは疲れていて當
然です。丁度、タクシーが来たのでこれで移動しましょうか」

そりやないぜ、神様。

運よく通りかかったタクシーを捕まえた彼はキラキラした笑顔を浮かべて、どうぞ、と私をタクシーへ誘導した。

つまり、もう逃亡は不可能だ。

逃走経路は完全に断たれて、状況は色々と絶望的。勘弁してほしい。

るーるーるー、と思わず遠い日になつてタクシーの窓から空を見上げるけど、少しだけ視界が霞んでいた。

ぐすん。これは心の汗なんだ、きっと。

隣に座つた彼は運転手さん相手に、これでもかといわんばかりの気品と優雅さ、ついでに金持ち感をばらまきながら行く先を指示している。

運転手さん、運転手さん、驚いてるのはわかるけど、口は閉じないとそのまま、涎でてくるよー。

「喫茶店には、5分程度で到着する予定です。飲み物だけではなく、軽食もあるのでそこで何か食べましょーか。オムライスや自家製パンのフレンチトーストが評判だと聞いています。デザート類も美味しいですよ」

「と、特に人気なのは?」

「アップルタルトと焼チーズタルトですね。どちらも何度か雑誌に載っていますよ」

隣の座席に座っている美形さんが言つた言葉に思わずガツッポーナ。

私は、甘いものが大好きだ。

愛してるし、奴らはもはや主食であると口頃から声高らかに主張している。

ある種の極限状態にいた私にとって甘いもの…………しかも、美味しいときた！…………にありつけるというのだからガツツボーズだつてうつかりしてしまつと思つ。

「甘いものが好きなんですね」

「好きじゃないです、愛します。四六時中いつしょにいて、できればお墓の中までお供願いたいと心から思っています」

「これまで多種多様な方々を相手にしてきましたが、甘いものに対して愛を囁く人は初めてです」

背筋がむず痒くなる様な綺麗すぎる笑顔と、なんだか珍生物を見るような視線を頂戴した。

不本意とはいってもこの手の視線には慣れているので、きれいさっぱり受け流す。

脳内を占めているのは、果てしなく甘美なスイーツたちの調べ。うああ、どんな味がするんだろう！携帯電話と甘味との運命的な出会いを記録するノートを持ってきてよかったです！！

テンションがぐぐぐーんと頂点に近い位置まで上り詰めていた私は、タクシーが止まると同時に財布に手をかける。

そつそと料金を払って甘味のもとへ行かねば！

「タクシーを止めたのは私ですから、私に払わせてくださいね」

「いやいや、相乗りって基本的に割り勘ルールが発動しますから…」

「わかりました、次からは考慮させていただきます」

さ、どうぞ。と、いつの間にかタクシーから降りた彼は、私が下りるべきドアの前にいた。

瞬間移動か！と戦慄した私は気づけば手を取られ、ついでに荷物も確保され、あれよあれよという間にビルの中へ。

「いかがう見えても、普通のビルだ。

地下へ降つる階段を下りて、ビルの迷路だと悪態の一つか一つか歩く。

初めは一生懸命、道を覚えようといたが、何回も右に曲がった時点で諦めた。地図があつても迷う。

「隠れ家的なお店ですねー。だけビ、こんな立地条件の悪いところにあつてお店やつていけるのかなあ」

「それについては、お話ししますよ。まずは中に入つましようか……お腹も空いてるようですが、ね？」

「自己主張が激しいお腹の住人で、めんなさい」

「これだけ期待されれば店主も料理も嬉しいと思こますよ」

美味しい匂いに触発されたらしい腹の虫といつも住人が歓喜の悲鳴を上げた。

うう、少しは状況を考えて鳴つて欲しい。

ひとつにお腹を押さえたものの、過ぎたものはどうしようもない。

楽しそうな声に少しの居た堪れなさを覚えたけど、ソロソロと彼のあとを追うようにアンティーク調の扉をくぐった。

少しだけ気になったのは、窓枠の中心に鏡がはめられていたこと。店に入る前に身だしなみをチェックしろってことかな。

スーツ着てるし、…追い出されたり、はしないよね……？

食いしん坊といわないで（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます！
次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

世間知りあといらないで（前書き）

基本的に、怖い話は好きだけど怖いモノは嫌いです。

あ、あと色眼鏡サングラスとコンタクトレンズも嫌いです。

世間知りずといわないで

見知らぬ眼鏡美人に連れられて、足を踏み入れた喫茶店はとても雰囲気のいいお店だった。

地下にあるのに、暗いとかジメジメした雰囲気はあるでない。

店の中に足を踏み入れた瞬間、どこかで嗅いだことのある香りが鼻をくすぐった。

食べ物の匂いは全くない。

ただ、お店全体に薫つている凜とした清々しい匂いに疲れが少しずつ溶けていくような感覚がした。

知っているのに答えが出でこない、独特のもやもや感にムツと眉間に力が籠る。

「あの席に座りましょ、落ち着いて話すには丁度……
どうか、しましたか？随分険しい表情をしているようですが

「へ？ も、そんなに酷い顔してました？！」

「酷い顔、ではないと思いますが眉間に皺は寄つてましたね」

「一んな顔でしたよ、と森田ついたつぱりに再現してくださったのはいいんだけど……顔のつくりが違うので正直比較の対象にはなりません。

彼には美形補正があるかもしれないけど、私にそんな素晴らしいものは一切ない筈。

だからもつと歌舞伎役者みたいな顔になつてたと思うんだ。

「お見苦しいものをお見せして大変申し訳ございませんでした。あの、Jの香りなんんですけど……何の香りなのかわかりますか? Jとかで嗅いだような気がして気になつてるんですけど、答えがでなくて」

「ああ、Jの香りは“菖蒲”^{ショウブ}の香りですね。少し他のモノが混ざつてはいますが悪いものではないので、安心してください。食事をしたり会話をする程度なら何の問題もないでしようから」

上品で穏やかな笑みを称えた美形は、何をしても似合^{シマハ}うらしい。着物姿で洋風の喫茶店にいるにもかかわらず何の違和感もありませんのだ。

ときどき、神様って本当は不公平なんだつて思つよ。そのキラキラの一つでも私に渡してくれれば、買い物するときに便利なのに!-

一番奥の席に座つた私達を見張つていたかのよつて、コックの恰好をした人が近づいてきた。

あくまで「コックの恰好」をした人だと私は思つた。

だって、脳内で描いていたコックさんのイメージをJとJとく覆し

ているから。

筋肉隆々の厳めしい体つきに違わない、山籠もりから戻ってきたばかりのような風貌。

髪は撫でつけてあるものの、無精ひげはいただけないと思うんだ、私。

「久しぶりに顔だしたと思えば、なんだア？」のちまつこのは

ザ・超重低音。

私たちが座つていいるテーブルの横に仁王立ちする大男さんから発せられた声はまさしくそんな感じ。

コックさんの服より、ヤのつく職業の人が着てる服の方が凄くイメージにベストマッチだよ！

「うつかり壁際ににじり寄った私に気付いたのか、大男さんはジロリと高い位置から私を見下ろした。

「ひつ…？！つ、すいませんごめんなさいもつしません逃げませんから命だけは甘いモノ食べるまでどうないでください」

「誰が食つか…ツーッチ。おい、須川！なんだこのちびっこーの…依頼人をここに連れてくんじゃねーって何度も言やあわかんだア？」

「おや？私がここに依頼人を連れてきたこと、ありましたか？ここにいる客が偶々（たまたま）、依頼人になつたことは何度かあつたと記憶していますが」

「……そーいや、今日はお前ら以外客はいねえんだつたな。んじゃあ、なんだ、このちびっこーの」

どうやら、このおつかない人は眼鏡美人さんの知り合いらしい。

それはわかつたけど…私、もしかしなくてもどんでもない人についてちやつたんじやないだろうか。

「後で話しますよ。それより、私はいつもをお願いします。彼女にメニューを渡してあげてください、あとお茶もお願いしますね」

「しゃーねえな、ちょっと待つて」

相変わらずキラキラしい笑顔を浮かべた眼鏡さんに、大男さんは盛大なため息をついた。

衝立の向こうへ歩いていく巨体を観察しながら私は息をひそめる。いや、なんか目があつたら何かが終わるような気がしたんだ。

私が戦々恐々としている間に、お水が入ったピッチャーとお洒落なグラス、メニューらしきものを持った大男がテーブルにモノを並べていく。

ことのほか、手つきが優しくて少しひっくりした。

「ほりよ。今日はオムライスセットがお勧めだ。値段は高いがどーせ、須川の奢りだらーから高いモン頼んどけやー

「高いといつてもこの店じやたかが知れてるでしょ。全く……これでいいですか？では、このお勧めとアップルタルト、焼チーズケーキをお願いします」

「お前はいつものだり？で、ちまつここの。飲み物は？」

「……アールグレイのミルクティーで」

自分の背が高くて力持ちそuddからって馬鹿にするなーアリンこ
もミジンコも必死に生きてるんだよ！

そういういたくなるのをぐつと堪えた私は偉い。

大きな背中が店の奥へ来ていくのを確認した私は、すかさず彼が何者なのかを聞いてみたんだけど、返事はあっさりしたものだった。

「IJの店の店主ですよ。IJIまでくるとどちらが本業なのか分からなくなりますが……ああ、そういうえばまだ私も名乗つていませんでしたね。私は、IJIのものです」

IJからともなくシンプルで無駄に高そうな名刺入れを取り出した彼は、一枚の紙を私の前に置いた。
一瞬、名刺ってどんなだけ？なんて間抜けなことを考えたのは言つまでもない。

「（なに、）この高級和紙使用の名刺。こんな手の込んだものみたことないんだけど）高や……ええと、綺麗な名刺ですね」

「そうですか？まあ、あまり手の込んだものではありますんが」

「普通の名刺は持った時に色変わらないと思います。しかもこれ、和紙でできるんですね？（はー、す、）いなあ……日本の技術」

初めはふつうの和紙だったのに、手に持つたところからサーッと色が透けた。

透明なアクリル板に和紙状の模様を加工してあるみたいだ。それだけならいいんだけど、花の透かしまでは言つてるんだから驚きもの。

最近の職人さんはすごいなあ、なんて光沢のある墨で書かれた名刺を透かしたり軽く振つたりしてみたけど元には戻らなかつた。

「須川 恵至、と申します。貴女のお名前をお聞きしてもいいですか？」

「え？あ、はい！すみません……えーと、私は江戸川 優といいます。名刺とかはまだ、その、持つてないので渡せないんですけど……って、そうだ！ちょっと待ってください」

就職先が決まってから作りつと思つていたので名刺なんてないけ

ど、名前くらいはしっかりと伝えておきたい。

メモ帳に書くっていう手段もあったけど、おもしろい名刺を見せてもらつたお礼には程遠いから、面白味はないモノのそれなりに丁寧な字で書いた名前を見てもらつことにした。

「はーーーっぱー書いたのでびひー

「…………履歴書、ですね」

「丁寧には書いてあるので読める時にはなつてるとおもうんですけど、やつさんの名刺に比べたら面白味がないですよね」

「いいえ、私にとつてはとても面白いものですよ。ありがとうございます」

綺麗な笑顔を浮かべて、履歴書を受け取った眼鏡美人こと須川怜至さんは熱心に私の履歴書を読み始めた。

少しだけ緊張するけど、面接を受けてる訳じゃないのですいぶん
気楽だ。

あーあ。他のところでもこんな風にリラックスして面接受けられた
らよかつたのにな。みんな怖そなおじさんなんだもん！

少し手持無沙汰になつた私は、改めてじっくりもらつた名刺を見
ることにした。

「あの、ここに書いてある“正し屋本舗”って社名ですよね？モテ
ル事務所か何かですか、やつぱり」

「事務所はあつていますが、モテル事務所ではありませんね。簡単
に言つてしまふと何でも屋、みたいなものです。少し特殊かもしれ
ませんが、それなりの収入はありますよ……興味が？」

「あります！どんなことするんですか？やつぱりペット探したり、
浮氣を突き止めたり、犯人を尾行したりするんですか？」

「似たようなことはしていますよ。人を探したり、物を探したり、
場所を特定したり………といつても、江戸川さんが考えて
いるような方法ではないとおもいますが」

「へえー、なんだか探偵みたいな仕事なんですね」

ほんとにあつたんだ、とお水を飲む私に須川さんは苦笑して、懐から何かを取り出した。

深緑色の布に包まれていたのは写真。

若い男女の写真から子供が映っている家族写真、ペットを取った写真、家の前で記念撮影をしている写真、観光地でとられたと思われる写真……とまあ、統一感のない写真が30枚近くテーブルの上に広がった。

これだけみると、普通の写真屋さんか写真コレクターなんだけど……そういう、楽しい写真じゃないことはすぐに分かった。

「（なん、か……冷たくて、重い感じがする）これ、つてあんまりいい写真じゃない、ですよね？」

「……その通りです。私の本業はこいついたモノを適切に処分することであったり、目には見えないモノによって私生活がままならなくなつている方を本来の状態に戻す手伝いをしています」

「それって、もしかして……れ、霊能力者つてやつですか？」

「そういうものの一角でしょつか。まあ、霊能力者や祓い屋、靈媒師、退魔士などという職業を生業なりわいとしている者は、見えない方からすると胡散臭い職業でしょう？」

まさか本人を前にして「そうですね」なんて言えるはずもなく、とりあえず、曖昧な笑顔で濁しておいた。

でも、確かに須川さんはなんだか他の人とは何かが違う気がする。顔はいいし無駄にお金持しそうだけど、そういうんじゃなくって……ここにいらないみたいなのに、誰よりも近くにあるような、そんな不思議な感じなんだよね。

「他には、一二月祭り（じゅうにつきまつり）の手伝もあります。命に係わる靈現象なんてショッちゅうあるわけではないので、そちらの仕事は滅多にありません。代わりにそういうた能力のある、もしくは“あらと想い込んでいる”方の選定や斡旋でしょうか」

「な、なんか凄いことになつてゐるんですね」

「最近はめっきり減りましたが、少しでも油断すると偽物やペテン師といったものが増えますからね。他にも問題としては依頼人の質、でしょうか。本当に困っているのか、それとも単なる気休めなのか……そのあたりの見極めも大切なんですよ」

どうやら、彼は霊能力者の紹介窓口に似た仕事をしているらしい。

一通り聞いたのはいいけど、お腹が空きすぎでいつも以上に脳みその働きが鈍っている気がする。

彼の言つていることは理解できなくもないけど、正直、かなり常識から外れているとおもう。

私はお化けとか幽霊はいるって信じてる方だ。

でも、進んで怖い目にはあいたくないし、遭あうとも思わない。
お化けや幽霊はテレビと本と口コミだけで十分だ。

……今更だけど、履歴書つて名刺代わりになるのかな……？

世間知りすとこわないで（後書き）

む、ちよつと短い…かな？

ここまで読んでくださつてありがとうございます！

いいカモだなんていわないで（前書き）

書き終わった！！と歓喜したのもつかの間、気づけば「一タガ消えていた罫（しかも2回連続で）

」「これがしんれーげんしょーか！！（確実に違う

いいカモだなんていわないで

生き返った！と歓喜するのは、私の胃か脳か。

今私は、今日一日の中で一番幸せだ。

空っぽになつたお皿とティーカップを見て、ついさつき味わつたばかりの極上デザートを思い出す。

程よい甘みのチキンライスがふわトロの半熟卵に包まれて、仕上げにキノコと野菜の旨みがたっぷりのデミグラスソースがたっぷりかかつた美味しいオムライス！

付け合せの大根サラダもシャキシャキして美味しいたし、スープも野菜がゴロゴロ入つてほんとに美味しい。

そして衝撃的だったのは、リングタルトと焼チーズケーキ！

どちらもタルトの生地はサクサク。

チーズケーキの方は濃厚で舌触りは滑らか、甘いだけじゃなくてレモンと多分、柚子か何かだと思うんだけどその風味が「う、いい具合に口の中に広がって鼻に抜けてく。

リングオタルトはリングオの煮詰め具合もむるむるとながり甘さと酸味のバランスが文句なし。
でも、お気に入りはなんといってもカスタードクリーム！「すう」と美味しかった！なんだあのカスタードクリーム！もうう～う切れ余裕で入っちゃうよ！

「一つともミルクティーによく合ひ」、私好みだし、是非ぜひティクアウトしたい。

「すう」と、おいしかった……特にタルト！「すう」とですよこれ、絶対行列できますよ！」

「こんなに喜んでもらえるなら連れてきて甲斐がありますね。怪我もないようですし、安心しました。考え方をしながら歩くのは、やはりよくありませんね」

「わかります、わかります！私もよく、ぼーっとしながら歩いたり、半分寝ながら歩いたりすることがあるんですけど、そういう時に限って電柱やら看板にぶつかっちゃうんですよねー」

「よくあるかどうかは別としても、ああいう風に人にぶつかったのは初めてだったので、久々に驚きましたよ。不思議な縁もあるものですね」「

偶然といえば、これは偶然。

でも偶然にしてはかなりの低確率だとおもう、お互いに考え方をしていて衝突するなんて。

これが漫画だと「この人は私の運命の人なんだわ！」とかってなるんだろうけど、相手を見て、それから自分の顔を鏡で見るべきだ。

「（「これがドラマか漫画なら間違いなく相手だけじゃなくて、ぶつかった側の人間も美人じゃなきゃダメなんだよ」）」

ふ、と思わず遠い目になつた私は悪くない。
自分の容姿くらい把握してるからね、うん。
須川さんみたいな人の隣に立つには役不足すぎるし、そもそも同じ
ここに立てる気がしない。

なんていうか、次元が違う。

「江戸川さんは就職活動中、でしたね」

「はい。絶賛就活中です」

「もしよければ、ウチで働きませんか?」

「……え?」

「考え方をしていた、といいましたよね?実は、私の事務所で新しく人を雇おうと思っていたんです。商売柄、堂々と求人誌に乗せるわけにはいかないので、知人を訪ねていたところなんですよ」

そういうえば、須川さんって霊能力者なんだっけ。

話をしていくと忘れそうになるけど、改めて客観的に見てみると

彼は確かに、どこか“特別”だ。

「どちら辺が特別なかつて聞かれると答えに困るんだけど……不思議な感じがするんだよね。

美形のオーラだ！って言われちゃえばそれで納得できるんだけど。

「知名度もある程度ありますし、基盤はできたので人を入れるにはいい機会だと思いまして。仕事の内容は貴女の能力に合わせて調整しますし、少しずつ慣れていけば問題はありません。給料は勿論、諸々の手当や保障もしています。必要経費はこちらで持ちますし、悪い条件ではないと思うのですが……」

「悪いどこのか好条件すぎて怖いんですけど……そ、それに！私なんかを雇つより、もつとこう、能力の高い人とかそちらへん『ロロロロ』口しますよ？そりゃ、雇つて貰えると助かりますけど、生まれてこの方、一度もお化けとか幽霊とかそういうのみたことないし」

「能力が高いだけの人間なら探せばいくらでもいるでしょう。ですが、周囲に馴染みにくい場合が多いんです。正し屋は業界内ではお

そらく、頂点といつても過言ではないほどの実力があります。ただし、これはあくまで我々の領域……つまり限定的なものなのでしかない

「んと、つまり、普通の人にも気軽に足を運んでもらえるようなお店にしたいから、普通の人間がほしいってことですか？」

「ええ、一言で言つてしまえばそうなります。祭りのこともありますし、地域には馴染んでおかないと今後、かなりやりにくい。そこで、正し屋の周囲の方に親しみを持つていただけるような人材を探していたんです」

な、なんだか過度の期待がかけられているような気がする！！
親しみやすい、っていうのは人によるだろうし、そういうのはやっぱり美人に任せるべきだと思うんだよね。いや、話しかけにくいのはわかるけど話してみたら意外と…みたいな展開がいいんじゃない
か！

黙り込んだ私に、彼は複数の紙を差し出した。

つ、次は何？もしかしてこの店の料理って物凄い高かつたりした？！

白状すると、画面に書かれていた給与の金額を見た瞬間に決めま

「雇用の条件です。記載している給与は手取りなので毎月最低でもこの金額が口座に振り込まれます。休みは基本的に週休2日制ですが祝日がある場合は祝日分も休みとします。有給は1年で12日、といったところでしょうか」

「すいません、今日からよろしくお願いします！！」

「……他にも条件がいくつあるんですが、見なくてもいいんですか？」

「お聞かせ一見にしかず、です！それに、なんとかなりそうな気もする」

した。

初任給でこれはない！これはないよ！…しかも手取りでこの金額とか破格すぎる。

「、」これなら奨学金だつてあつとこういう間に返せる気がする。

べ、別にお金に困がくらんだんじゃないよ！

説得力はないけど、靈能力者の人人がどんな仕事するのかも気になるし、普通とはちょっと違う職業つて誰でも一度は憧れると思うんだよね。

私もお化け屋敷とか大嫌いだけど、怖い話は好きだし、テレビの心霊特集とかもよく友達とみてた。

肝試しの経験はないし、コックリさんとかもやつたことはないけど、興味はあった。

ありきたりだけど、靈能力とかがあれば、なんて想像して友達と盛り上がったこともあるし。

「では、この契約書に署名をお願いします。実印は持っていますか？」

「えーと、たしか鞄に……あ、みつけ！えーと、ここに押せばいいんですか？」

「はい …… これで契約成立、ですね」

「もうこれでハローワークと大学の就職課を往復しなくていいし、求人雑誌とにらめっこしなくてもいいんだ。それに動きにくいスースも足痛くなるヒールともおさらばできるって、こんなに嬉しいことだつたんですね」

少し大げさじゃないですか?と苦笑する須川さんに、そんなことない!就活って凄く大変なんですよ!?と苦労談を力説した。美形の苦労は私にはわからないけど、同様に美形は私たちの苦労なんて微塵もわからないのだ。

「なんだあ?お前、二つの下で働くのかよ」

「ついたつき、就職完了しました。これで私も堂々たる新社会人の

仲間入りです

「うだー」と胸を張つてこると頭を「コワシッ」と掴まれて、そのままぐるんと半回転させられる。

首がグキッていつたよ！あだだだ、もげるーもげるーでーーー！須川さんに背を向ける形で、私は上半身を捻る羽田になつた。うわ、最近というか運動なんて殆どしてなかつたからバキッていつたよ。やばいな、これ。

「喜んでるとこ」、水差すよーで悪イが、コイツ、かなりアレな性格してんだ

「あ……アレ、ですか？」

現実逃避をし始めた思考を現実に引き戻したのは、近くで聞こえる超重低音。

な、なんか、すぐく口まちゅうしてん一体の芯に響くっていうか、色々危険だよこの声！

頭にあつた手がいつの間にか肩をつかんでいる。こ、逃げられない！

「見た目に騙されんだよ、特に女はな。ちまついいのにや、コイツの面アはあんま好みじゃなかつたみてえだけどな」

「いや、好み以前に美人過ぎて怖いっていうか、あの、なんていうか世の中の不条理をうつかり覗いちゃった感じがします。隣に並んで歩けば、部下っていうより召使いかお手伝いさん見習いにしかみえません」

「よしーよく言った。ま、こんだけ団太けりゃ大丈夫だろ」

ペイツと元の向きに戻された私の正面には、相変わらずキラキラした笑顔の須川さん。

後ろで大男さんの狼狽えたような声が聞こえるけど、なんでそんなに慌てる必要があるんだろう？なんて考えていると、頭に衝撃。

正確に言えば頭を支えている首に大ダメージだ。

「あだだだだだ！－い、痛いつ－ち、縮む－－－ツ－－！」

「し、しつかしあれだな！中学生だか高校生だかは知らんが、最近のガキは随分しつかりしてうア」

「雅。いい加減に叩くのをやめなさい。貴方のところの修行僧ならまだしも、女性なんですよ？」

「いや……あの、それより、私、成人して数年経過してるんで、
ガキはちょっと」

「はア？」

「そういえば、この生年月日からいくと成人していますね」

大男さんの反応にも傷つくけど、そういえばって須川さん……貴
方もさりげなく酷いと思います。

会話がぴたりと止まつて、音は店内に流れるBGMだけになつた。
うわあ、沈黙つて重かつたんだね！

「……さて、随分長居をしてしまいましたね。江戸川さん、事務所には明日、「」案内いたします。引っ越しも同時に予定なので家に帰り次第、荷造りをお願いします。家具やベッド、その他日用品で必要なものは新しく買い換えましょうか。もし思い入れのある家具などがあれば、引っ越し業者に言ってくださいね」

「え? ちよつと待ってくださいーひ、引っ越し?」

「ルームに書いてあるでしょ。雇用条件の一つ、事務所での住み込み」と

「ほ、ほんとだ」

「お前、読んでなかつたのか? ふつー、目くらう通すだろ? ー」

「いや、だつて……就職する方が大事だつたし」

もし、雇用条件をしつかり読んで躊躇したら踏ん切りがつかなくなりそうだなんだもん。

条件の中に“頑張りようがない”条件があつたりなんかしたら、サインはしなかつただろ？

後でじっくり見ようと思つたんです、なんていつても大男さんは信じてくれなかつた。

……たぶん私も、なんだかんだで見ない気がするんだけどさ。

「（引っ越し、かー……心機一転…って感じ。ちょっと不安だけど、何とかなる、筈）」

自分にそつ言い聞かせながら、テーブルの上で小さな水溜りを作つているコップを手に取る。

汗をかいだグラスは、ひやりと冷たくて、とんとん拍子で就職したことが嘘でも妄想でもないことの何よりの証明のように思えた。

「（うん、これも、きっと何かの縁だよね。応援してくれた人に恥ずかしくないよう、ちゃんと、がんばるつ）」

氷が解けて、中に閉じ込められたミントの葉がぱかりと浮かんだ水を煽る。

清涼感のあるミネラルウォーターが喉を滑るよつて落ちていった。

いいカモだなんていわないで（後書き）

悔しくて不貞寝したので更新が遅れました。無念。

ここまで読んでくださりありがとうございました！
次もがんばるぞーい。

開話 力モはネギをしようとしてる? (前書き)

一応、これで序章的なものは終了、の予定です。

や、触りにしては長かったなー (遠い田

閉話 力モはネギをしょつていく？

私の部屋は今、すつからかんになっていた。

余計なものがなくなつて、一番初めの……なにもない、何も入れない状態になつた部屋を見て思わず、ため息がこぼれた。

一般的な女の子よりは少なく、男の人よりも多い荷物はものの1時間ほどで外に運び出された。

ビニールシートの上に広げられた家財道具を見て立ち止まつたり、何事かと尋ねる人は多かつたけど、比較的ご近所付き合いは良かつたので変な誤解は受けなかつたと思つ。一応、ちゃんと説明したし。

「昨日の今日で引っ越しなんて引っ越しの神様だつてびっくりだよ、

「アッヒ

空っぽになつた部屋から出た私は、ブルーシートの上に広がる家財道具を見て回つた。

引っ越し業者の人たちが丁寧すぎるほど丁寧に扱つていたのは基本的にホームセンターで買った組み立て式のものだ。運び出されている最中、物凄く申し訳なく思ったのは言わなくてもわかるだろう。

すつじぐ申し訳なかつた。うん。

「（でも、引っ越しの費用ビリュウか業者やんの手配までしてくれる会社つて滅多になに、よね）」

引っ越し宣言を受けたのは昨日。

で、引っ越し宣言通りに行われた。

驚いたのは、引っ越し業者が殆ど全員女性で構成されていたことなんだけど、こつそり話を聞いたらそういう指定を受けたらしい。まあ、引っ越しとはいえ男の人が部屋に上がって家具を運び出すのって少し、気後れするし。

一応こんなでも女だから、見えないとひの埃とか賞味期限がアレな缶詰とかは見られたくないわけです。

「江戸川さま、室内の確認ありがとうございました。不備などはありませんでしたか？」

「あ、はい。名前を書くのってここでいいんですね？」

「……、はい。ありがとうございました。丁度、鑑定が終わりましたので、確認をよろしくお願ひいたします」

恭しく頭を下げた一番偉い人っぽい女人に見送られ、ビニールシートの前に立っている人に近づく。

敏腕鑑定士！－という看板を背負っていてもおかしくない知的美人は私と目が合うとうらやましい微笑を浮かべる。

美人だ。問答無用で美人だ。私が男だったら、今この瞬間にどうやって連絡先を聞きますか考えていただろう。

「お待たせいたしました、電化製品を含む家財道具をすべて算定させていただいた上村と申します。今回の引き取り金額ですがこの金額になりました。確認をお願いします」

「え、こ、こんなに！？い、いいんですか…？これ、殆ど組み立てたものだし、電化製品だって結構長い間使ってのに」

「使用状態が大変良かつたのでこの金額になります。同意いただけましたらこちらにサインを」

言われるがままにサインをした私ははつと我に返る。

実は、雇用契約書にサインした後、その場にいた大男さん
…もとい、黒山 雅さん …にしこたま怒られたのだ。

契約書の類にサインする前には、必ず隅々まで目を通せー!って。

本気で食べられるかと思った。重低音って、ほんと体の芯に響くね……一瞬、地震かと思った位だし。

今回の引っ越しなんだけど、実は『契約後は速やかに住まいを「正し屋本舗」事務所二階の住居区域へ移し、そこで生活することに同意する』って雇用条件の欄に書かれてたんだよね。

引っ越し自体はいいとしても契約した翌日に引っ越しっていうのはいくらなんでも焦りすぎだと思う。

何か理由があるのかな、なんて考えたりもしたけど、やーっぱりわからなかつたので諦めた。

「（こ）しても、私にとつてホントに大事なものって鞄一個で間にあつかやうんだなあ（」

必要最低限の貴重品は友達にもらったアクセサリーと形見のダイヤのネックレス（といつても結婚指輪をネックレスにしたやつだから、ダイヤつていつても小さいんだけどね）、あとは貯金通帳とお財布、携帯電話と充電器、連絡先が書かれた手帳と卒業アルバムが3つだけ。

服や下着といったものは何故か処分するよう言われた。

よくはわからないけど、言われたとおりにしていくうちに大切なものは見事に旅行用のカバンに収まったのだ。なんだか自分がものすごく、小さい人間のように思えて悲しくなったのはここだけの話だ。

うう、鞄一つの青春とか虚しすぎるんですけど。

引っ越し終了を見計らつて到着したタクシーの中で、諦めにも似た笑みがこぼれた。
あー、運転手さん、いいんです。放つといしてください。
いますっごく荒んでるんで。

よし、こーなつたら、あとで古酒を呑み合ってやるー。

「…………、いのせかがり、どうですか

「気に入ったものがなにようなら作らせてます。希望はありますか?」

私が就職した会社の名前は『正し屋本舗』という少し変わった会社だ。

でも、そうじやないことがわかった。

変わつてこるのは『正し屋本舗』という会社ではなくて、経営者

そう、須川さんその人だった。

彼の容姿が整つているのは一目見ただけで十分すぎるほどに理解できる。

それに身に着けてる服とかモノから高級感が漂つてるから、お金はあるんだろうなーとは思つてたけどここまでだとは思わなかつた。

「…………須川さん」

「なんでしょう?」

「多分、ちょっとばかり私と須川さんの金銭感覚にずれがあると思

います

「そういえばそうですね。先ほどから安いモノばかり見ていましたし……これはよくできているように見えますが、まだまだです。あちらに置いてあるものの方が素材も職人の腕も格段に上ですから、あちらの方がいいでしょう」

「ちょ、ま、待ってください！そーじゃなくつて……あああ、ストップ！お願いだから早まらないでください！桁つ、桁みて！一桁ど二桁か一桁多いです！」

「！」の価格なら安い買い物です。ですが、このデザインは女性には向きませんね。クローゼットはあるのですがもう少し小さめの箪笥と姿見を買いましょうか。木も悪くないですが、陶器製のものもあるようですし、そちらも見て決めた方がよさそうですね」

一人、何かを理解したように頷いたかと思えばたすたと別の売り場へ歩いていく。

私はそれを追うのに必死だし、追いついたら追いついたで高級家具をポンポン買いそうな彼を止めるのに必死だ。私こんなに疲れる買い物初めてなんですけど！

こんな感じで店内を回って、別の店へ日用品を買いに行く頃にはもう、ほとんど気力は残つていなかつた。日用品も高かつたけど、家具に比べたらどうつてことない。

普段の私なら絶対に躊躇するような値段だったけど、家具店で感覚が麻痺しちゃつたんだ、絶対。

「さて、一通り当面の生活に必要なものは揃つたので、少し休みましょうか。昼食もまだでしたし、ちよつといいでしよう。何か食べたいものはありませんか？」

「食べたいものですか……あ、美味しいわらび餅が食べたいですー！」

「それならいい店を知っています。そこなら町の案内もできますし、楽しみにしていてください」

花も見惚れるような笑みを浮かべる須川さんを見るたびに、形容しがたい敗北感に襲われながらハイ、と首を縦に振った。

運転手に店の前で止めるよつに告げ、車の中へ正し屋がある町について教えてくれた。

正し屋があるのは、縁町えんまちといつあまり大きくはない町。

面白いのはたつた一つの町に、12ヶ所の公園とそれに通じる社があるらしい。

社に社に通じる道や公園にはその社をつかさどっている神様が好んでいる樹や花が植えられて、毎月、どこかしらの公園で祭りが開催されるんだって。

これを『十一月祭り（じゅういちがつまつり）』と呼ぶんだけど、このお祭りは物凄く有名だ。

縁町はお祭りだけじゃなくって、腕のいい職人さんを育成することに力を入れている町だつてこともあって、競うように自慢の品を祭りに出店する。だから、いいものが並んで、それが他の街だけじゃなくって海外にまでその評判は轟いている。

「でも、そのお祭りの手伝いって言つても『正し屋』って職人さん、いないですよね？何を手伝うんですか？」

「依頼されているのは神を迎える準備と神卸しまで、ですね。後は呪符や御守りの類を社で売つてもらひへりでしちょうつか？」

すいません、神様とお知り合いなんてきいてないんですけど。

ひくつと口元がひきつったのを自覚した。

でも、もう就職してしまったものは引き返せないので早く慣れる

よつに頑張るつと想ひ。

なんか立派なこと言ひてゐるよつと聞こえるかもしないけど、ぶつ
ちやけ私にでれるのはこの位しかないんだよね！

「へへへ、私は田ぐるぬく（～）非日常と日常の境田ぐと呪を踏
み入れちゃったんだす。たほー

閉話 力モはネギをしょつていく？（後書き）

ここまで読んでくださつてありがとうございます！

これで一応、序章みたいなものは終わりです。次から、なんやかんやで癒し成分入れていこうかなあ…等と田舎でいるので、もしよければ暇つぶしにでも読んでやってください。

PS・お気に入り登録してくれた方があることに気付きました。思わず、田舎をしてからもう一回確認しちゃったほど。

ありがたやー、ありがたやー。

いや、あの、本当にありがと「ねこまつ！」がんばるやー、ふあつとー！

備考と補足があります。

・ 小説外で説明する必要がなくなるくらいの文才が欲しい（ボソッ

十一月祭り

正し屋がある縁町は、職人による伝統工芸や田用雑貨の他にも田の最後3日間で催される“月祭り”といつ祭りが有名。

これらはひと月を無事に過ごせたことに感謝してその月を司つている神様への感謝の気持ちを表す為に昔から行われていた。今現在

はその意味合いが半分、職人たちの腕を競う、もしくは限定品の商品を売り買いする機会として認識されている。

洒落にならない森林浴（前書き）

正し屋での生活（仕事？）がスタートです。

世の中上手こじとばかりではありませんよねー。

洒落にならない森林浴

今一度、^{いまいちど}神様に嫌われるようなことをしたのか聞いてもいいですか。

私が『正し屋本舗』という一風変わった会社に就職したのは、三日前のこと。

三日前に契約書にサインして、一日前に引っ越しを終え、昨日は町の人挨拶して回った。

正し屋のある縁町は、古き良き日本と現代の技術をうまく組み合わせた風情ある町として有名なのは日本国民なら誰もが知っている。

でも、聞くと実際に見るとのではやっぱり違う。

職人さんの町だつて聞いてたから、イメージとしては怖い顔の職人さんだからで緊張感にあふれてる筈だ、と思つたんだけど……凄く優しかつたり、気持ちのいい人だらけだつた。

仕事をしてる時はイメージ通りの顔になるんだけど、仕事をしてない時は話しかけやすいおじさんだつたりおじいちゃんだつたりする。お店を仕切つている奥さんは、気前のいいお母さんみたいな感じで、すつごく買い物しやすそうだつたんだよね。

食べ物も美味しいし、景色は綺麗だし、文句なんてあるはずない。
……甘味処も多いもんね。

で、だ。

本来なら、今この時間は確實に正し屋で仕事をしている筈だった。

整理して欲しい書類があるつていつてたし、その為にわざわざ最新のパソコンまで買ったから、てっきり初仕事は書類の整理とデータ入力だと思ってたのに。

「研修するにしたつて、森はないとおもいまーす」

なんかもー……笑うしかない。

ご飯を食べた後、出かけるから車に乗るようになに言われて車に乗ったまでは覚えてる。

で、気づいたら見覚えのない森の中にいた。しかも一人ぼっちで。なんだこれ。

見覚えがないのは途中で爆睡した私が悪いんだけど、お腹はいっぱいな上に、隣から優しい感じの美声で「時間がかかりますから、眠っていても構いませんよ」なんて言われたら即寝落ちだと思ひ。

一人寂しく、森の中で小さな主張をしてみたけど、やつぱり何の返事も突っ込みも帰つてこなかつた。

うう…虚しい。せめて友達と一緒に豪快かつ華麗に突っ込んでくれるのに…！

「にしても、なんで森なんだろ？事故つたって訳じやなせうだし
なあ」

だって、事故なら近くに車が転がつてたり、血痕的なものがあつてもおかしくない。

それに事故るなら大体は崖とかに気付かなくつてバーンーってなると思うんだけど勿論、崖なんてない。

ちょっとした溝？とか段差みたいなものはあるんだけど、それで事故るとは思えなかつた。

だって、木が生い茂つてる所為で車が通れるような幅がない。立ち上がり周りを見渡してみたけど、湿つたような土と昔の生えた太い木が無数に生えていただけだつた。

地面に倒れてる木もあるんだけど、座る気にはなれない。まだ日中なのに殆ど陽の光が差し込まない所為で、カビとか生えてそうなんだよね。

座つた瞬間にぬめつとして、つるつとこつたらやだし。

「へ、うわああ？！なんでこんなとこに木が……れ？木じゃない」

何かに躊躇して、どうにか転ばずに済んでほっと胸をなでおろした
私の視界に飛び込んできたのは、初の人工物。

頑丈な作りで、なんだか沢山お菓子が入りそうな登山用リュック
サック。

誰のだー？落し物ですよー！なんて叫んでみたけど、当たり前のように返事はなかつたから、中身を的めり一つと見せてもらひつこうとした。

「なんか生きるのに必要なものがじつぱに入ってる……って、この
高そうな封筒！須川さんの手紙だ！」

私の中ではもう、高そうなものの「大体須川さんの仕業つていう方程式が完成している。

一緒に買い物するには悟りが必要なんだよね。

いそいそと手紙をあけて薄暗い森の中で読み上げる。

普通なら声に出して読んだりしないんだけど、声でも出さないとやつてらんないんだよ。察して欲しい。

「むー、なになに？」『優君へ 突然ですが、この森を自力で抜けていただきます。用意したのは水と方位磁石（特別製なのでなくさないよう）。森を出られなくなりますよ）、地図と食糧、あとは携帯用の図鑑が2冊、携帯鍋、ナイフ、御守りと懐中電灯です。火をつけるマッチも入っていますが、山火事にならないように後処理はしつかりしてください。貴女なら多分、恐らく、八〇%程度は大丈夫だと思いますが十分気を付けるようにして下さいね。健闘を祈っています』

『P.S. 到着地点は食事が美味しいことで有名な旅館です。甘味も用意しておくので頑張ってくださいね』 って、なんか突っ込みどころ満載過ぎて、突っ込む気力がまるでおきないんですけど』

ちらつとカバンの中身を確認したけど、確かに手紙の内容通りのモノが入っていた。

その他に、よくよく調べてみるとリュックには寝袋や毛布も括り付けられてるし、着替えも2着はいたから物凄く困るってことはない。地図で確認したら川沿いになんとなーく歩いていけば大丈夫っぽいし、川さえ見つかればこっちのものなんだよね。

有難いことに、今いる現在地のところに印もある。
西とか東とか北とか南とかって地図で見てもさっぱり分かんないけど、方位磁石があるし……大丈夫、だよね？

あ、でも結局ここがどこの森なのかさっぱりわかんないままじやね？なんて気づいたのは五分後でした。

洒落にならない森林浴（後書き）

やつとアップできたーーー！

み、短いけどいい…よね。うん、だつて章の始まりだし！

うう、一日に1話更新を目標にしてるんですけど…執筆速度って上

がらないモノですねえ（遠く田

なにはともあれ、ここまで読んでくださってありがとうございます

た。

洒落にならない森林探索（前書き）

森と海なら、必要最低限の装備で生きていく。と思つ。

食べ物は冬以外ならいつぱいあるしね！おすすめは秋と春。
調理いらないのは圧倒的に秋。夏は蚊がいそだからマジ勘弁。

どうやら私は、大変な場所に不法投棄されたようです。

クレーターみたいな場所から脱出した私は、とりあえず、色々考えた。

最終目標は、旅館で食べる美味しい甘味。

とりあえずの目標は川を見つけること、川が見つかったら寝やすそうな場所を確保することだ。

あと、できるだけ食料も確保したい。

食料確保つていつても、食べられそうな木の実がとれる木はなさそうだし、山菜も食用野草もなさそだから川で魚を捕まえるしかない。薦みたいなのがあるからそれで罠を作った方がよさそう。

なんで私が食べられそうな山の幸を知っているのかといえば、私が田舎に住んでいたから。

いや、田舎に住んでもると娯楽が少ないからつい、「ー、山とか川で色々採取するのが楽しくて楽しくて。山菜とり、秋の果物狩り（山ぶどうとか栗とかね）、キノコ狩りなどなど、ホントに食べられるものと食べられないモノ、ついでに現代社会には到底必要ないよーなサバイバル術が自然に身についたわけです。あんまり嬉しいないけど、有難い。

「森の中なのに、なんでこんなにマイナスイオンを放出するの？」を放棄してゐるのさ」

大体、変だと思つんだよね。

私の知つてゐる森は、同じく同じくらい木が沢山生えてても、陽の光が差し込んでた。

鳥の声も、虫の鳴き声も、木の葉がしゃれあって出す心地に声も…

「（）」、「（）」

それだけじゃなく、この森は他の森とは“根本的なもの”が違つてるよつた気がする。

一体何が違うんだろ？と歩きながら考えた。幸い、時間だけはたくさんあつたから。

歩いて、歩いて……気まぐれに携帯で時間を確認したらスタート地点から2時間近く歩いていた。

水の流れる音はまだ聞こえない。

耳が拾つづ音といえば、枯葉の上を歩く私の足音や自分の呼吸音くらい。

足を止めると、じん、と耳が痛くなるくらいの静寂に包まれるのが嫌で私は五分だけ近くにあつた岩で腰を下りして休んだ後、また地図と方位磁石を頼りに歩き始める。

山歩きは慣れてるからまだ疲れてはいないけど、少なくとも日

が沈む前に川を見つけたい。

雨が降つてゐる時に、水の近くにいるのは危ないけどそういう限りは川辺で野宿するのが一番いいって教わつた。理由はこざかという時の飲み水が確保できるからだ。

それに、きれいな川だつたら魚も捕れるし、水辺でとれる食用野草は結構多い。

「あ……そ、つか。変だ変だつて思つてたけど、生きてないんだ、この森」

いひんなものが、生きてない。

厳密に言えば森　　…木とか森を構成してゐ一つ一つ自体は生きてゐ。

例えば、土の中の微生物とか大嫌いなミミズとかね？確認していないけど、あつといふはず。

あー、うーん、上手に言えないけど、生き生きしたマイナスイオン溢れる森じゃないのは確かだ。

決意を固めて歩く」と二時間、時刻は午後3時30分。

できるだけ長居はしたくないのでキリキリ歩こうと思っています。
ええ、キリキリ歩きますとも。

「飯を食べるのを我慢して無心で歩いた甲斐があつて、うつむき水の音が聞こえてきた。

ちなみに「飯（カ○リー○イト、チヨコ味！結構好きなんだよね）」は一日2本。それで計算すると1~2日は持つ計算だ。本当はもっと食べたいけど、何があるかわからないし、無事にたどり着けるかどうかわからないから余裕をもつて置くことにした」とはない。

でも、やつぱりお腹は空くから、飴玉を一つ口に入れる。レモン味です、つまり。

ちなみに飴玉とチヨコ味ノートが食料の中に入っていました。
流石です。遭難したとき、これらがあるのとのじや生存率が
「ぱーっと違うってテレビの特集でいつてたし間違いないと思つ。

「なーんか、疲れてるせいかもしないけど……歩けば歩くほど、空気がぐるぐる~んつてなつてるような

つまりは、山を登れば登るほどに、なんだか凄く空気が濁んでい

く気がする。

暗さは森の中で田が覚めた時よりも深まって、空を仰いでも生い茂ったよくわからない木の葉っぱで殆ど空は見えなかつた。木ばっかりだし、似たような風景ばかりだから方向感覚もおかしくなつてきて、自分がどこを歩いてるのかわからなくなることが結構ある。

幸い、方位磁石と地図があるからいいんだけど、もしこれで何も持たずにはいったら完全に迷子だ。

食べ物になりそうなものも一切ないし、雨が降らなければ水の確保も難しい。

いや、そもそもこんな暗い森の中に入ろうって人間の気がしれないよ。

私みたいに不法投棄されたならともかく。

文句と森に関する疑問をぶつぶつ口にしながら（だつて寂しいんだもん！なーんにもないんだよ？！）、水音がする方へ歩いていくこと30分、突然、なんの前触れもなく黒い、影が遠くの方で揺れた気がした。

進行方向だからこのままいけばよく見えるはずなんだけど……なんか、凄く、近づきたくない。

近づけば近づくほど、シルエットがはっきりしてきて、ものすごく嫌な予感しかしない。

太い木の枝から垂れ下がるひも状のモノの先端には大きな、そう人の、形をした黒いモノが音もなく、ぶら下がつてゐる。

頭では見えてるものが人だつたもののはわかつてゐるんだけど、そう簡単に認めたくなくてこの目で確かめるまでは前方の黒いモノについてでは深く考えないことにした。

黒い影に近くづくと、変な汗が滲み出でてくる。

知らないうちに体をできるだけ縮めて、影から身を守るよつた姿勢で歩いていることにふと気がつく。

「（もうこれ以上、近寄りたくないけど……でも、知らないといけない気が、する）」

歩きながら、ぼんやりとこの森について考えてたんだけど、たぶん…この森は“裏・雲仙岳”樹海”だと思つ。

正し屋がある縁町から車で3時間くらいかかる場所に“雲仙岳”つて名前の山があつた筈だ。

この山は日本の絶景50選に選ばれるくらい有名だから流石の私で

も知つてたんだよね。

この山、実は双子山になつてゐるんだけど……正面にある雲仙岳のすぐ後ろにほとんど同じ大きさの、でも、雰囲気が真逆の山がある。その山は通称“裏・雲仙岳 樹海”つていわれていて、自殺の名所中の名所としてある意味、雲仙岳よりも有名なんだけど……。

「す、須川さあ～ん……な、なんでこんなとこに置いてくのー？！うう、黒いのあれだよね、絶対ぜつたいアレだよね？！こんなところで野宿するのほんとに勘弁して欲しいんですけど」

裏・層仙岳はときどき、テレビで取り上げられる。

勿論、ニュースでもあるけど主に心霊番組で。

自殺の名所つて基本的に、そーゆー特集で取り上げられることが多いみたいなんだけど、この山に限つて必ず何かの映像や写真が撮れてるみたい。

「は、ははは……これはあれだよね、確実にお化けいるパターンだよね。間違いないよね」

自殺の名所＝仏さざれいん。

超有名心靈スポット＝お化けさんいん。

うう、今日の夜は寝ないほうがいいかな？でも歩きっぱなしだから絶対寝ちゃう。

「（朝まで熟睡できればいいけど、金縛りとか初体験しちゃつたらどうしよう！？須川さんに呪文的なもの聞いておくべきだった…？あ、でも確かバッグの中に御守りが入ってた……ってやつぱりどー考へても心靈スポット決定だ）」

がつくりと肩を落として頃垂れたところで助けてくれる人なんてどこにもいないんだけど、落ち込むくらいは自由にさせてほしい。

半泣きになりながら鞄の中から御守りを取り出して、手首にしつかり結びつける。

その上で落とさないように握りしめて、じりじりと黒い物体と間合いを取りながら前進していくことを決めた。女は度胸だ！根性だ！よ、よしー須川さんの御守りだから絶対効果はある… 等。

「つて、あ、あれ？あの黒っここの何処いったんだろ……？まさか移動した、なん、て、ことはないよね……？」

恐る恐る、背後を確かめる。

ゆ一つくじゅうくくり振り返つてみたけど、何もなくてホッとした。心底ほっとしたよ！

で、今度は正面を向くときも細心の警戒心を持つて振り向いた。

だって、よくあるパターンでしょ？後ろ向いた時は何もないんだけど正面向いたらドーン！ってパターン。あれはないわー、ほんとないわー！！

「ハツ？！ち、ももももしかしたら、やつらのつて死体じゃなくて……えーと、えーと」

じわじわと物凄い汗が全身から吹きってきた。

あ、あれー。なんかすごい寒いんですけど。

御守りを持つ手が震える、ついでに足も思い出したみたいにガクブ
ルしてきた。

「や、やつぱり、お、おおおおお、おば、お化け……？」

うひょあああああああ、と奇声が体の底から吹き出て声になつた。
声が出るとよつやく生まれたての小鹿的になつてた足も動き
始める。

方位磁石と地図を左手に握りしめ、右手には御守りをがつりも
つたまま、お化け（仮）がいた場所から逃走を図る。

好き好んでお化けのいるところにいようとする人間の気がしれない
よー！

全力疾走して、走りに走つて、筋力の限界を悟つたところで私は
そのまま崩れ落ちた。

服が汚れるとかも一ビーでもいい。

息がしにくいどころか、息を吸い込む度に肺が「つかれたよー！」は
たらかせんないよー！」つて悲鳴を上げてる。つまり、痛い。息苦し
いんじゃなくて、痛い。こればかりは運動が得意な人にはわかる
まい。

「ひ、口亦…ザほシ、ゼひゅー……う、運動…ゼひゅー……不足、だ」

深呼吸を繰り返して、ようやく状況判断ができるまで回復した。冷や汗じやないある意味健康的な汗をぬぐって、ようけつも立ち上がつて、現在地を見渡す。

相変わらず木はあるけど、さつき私を取り囲んでた木とは少し、雰囲気が違う。

それに土も少しだけ砂っぽいし、小石が多く混じってる。なにより、水の音が近くから聞こえてくることを考えると、ほんの数m先に川がある筈だ。

「な、何とか今日中に見つかった……ええと、次は寝床探して、乾

燥した木拾つて、ついでに薦で罠をつく……あ、でもその前に魚が住んでそうな川かどうか確認しないと。あーもー、ほんとよかつた

実は、今日中に川が見つかるかどうかわからなかつたんだよね。
だからすゞく嬉しかつたんだけど……この時の私は、すっかり忘れ
ていた。
私がいるのが、かなり特殊だつてことも、ついせつを見たモノのこ
とも。

たぶん、これからが私にとっての本当の始まり。

洒落にならない森林探索（後書き）

前のが少し短かったのでひよっと感め？に…と思つたんですが、書いてる最中は長く感じても、いざ読むと短い罫w
これから少しづつホラー要素がはこります、おやぢべ。

ここまで読んでくださいとあります！
次もまた、頑張りますのによければお付き合くださいませ。

P.S・お気に入りの件数が1件から2件になっていることに気付きました。

ありがたや～、ありがたや～。すかさず拝み倒したのは書つまでもないと思います。うう、うれしそぎるーがんばんべーーー！

洒落にならない野宿 1（前書き）

最近、美味しいモノに飢えています。

美味しいモノが食べたいのに、何を食べたいのか出てこない……く
ーちーおーしーやー。

」の森の、夜を恐れるのは生き物として当たり前の行動だ。

目の前に広がる川を見た瞬間に、知らないついに溜まっていた
らしい疲労感が押し寄せてきた。

気が緩んだ瞬間に、疲労感が容赦なく襲ってくるのはわかっているけど、どーせなら寝るときに襲ってきてほしかったよ。今日はまだやらなきゃいけないことがいっぱいあるのに…。

現在進行形で私は、今現在川沿いを歩いています。
勿論、上流に向かつて。

そうそう、肝心の川なんだけ幸いにも綺麗で、そのまま飲んでも問題はなさそうだった。

ただし、いくら見た目が綺麗でも飲むときは煮沸消毒必須。生水をそのまま飲むなんて行動は最終手段です。ええ、最終手段ですとも。

「流石、だなあ。川だろーと何処だろーと関係なしに空気が重苦しい。普通、どんないけ好かない森だつて常に水が流れてるところは大体清々しい空気だつて相場は決まってるのに」

見る限りではじっくり普通の川だ。

幅は大体6~7m位で川辺は浅いけど、中央に行けばじくほどそれなりの深さがあるんだろう。

川の位の川なら一～二三程度の深さだらうナビ。

川辺には大小さまざまな小石と上流から流れてきたらしい枝が転がってるぐらいで、「ヨリがない分中々にみられる光景ではある。でもやっぱり、好きじゃないモノは好きじゃない。

川から少し離れたところを歩きながら今夜の寝床を探す。

言つておくけど、森の中では野宿はしたことない。いや、町の中でも野宿はしたことないんだけど。

寝床の条件としてまず、優先したいことがあった。

「雨風以前に、このどちらより空気が少しでも薄らつてゐるといいかも
ないと。絶対怖い夢見る」

「くら神に一物も三物も与えられた須川さんからの御守りがある
といつても、やっぱり不安要素は極力減らすに限る。

キヨロキヨロと落ち着きなく周囲を見渡しながら、ときどき遠くの方に黒い何かが見えることがあつたが綺麗さっぱり見なかつたことにして歩みを進める。ぶら下がつてゐるのが森の方に5～6体見えた時は、さすがにゾッとしたけどやっぱり見なかつたことにした。

田があるかどうかはわからないけど、田なんかあつた田には色々終わりだとおもつ。

万が一を考慮して川を歩きながら、半ば必死に探し始めて数十分。

川に近いからわかる、空の変化に気づき田を細める。まだ夏だから5時や6時では真っ暗にならないけど、流石に少しづつ明るさを欠きはじめている。

少し焦り始めたころ、今まで見てきたものとは少し違う景観になつたことに気が付いた。

樹や苔と小石ばかりだったのが、今じゃ木と苔と大岩小岩を中心に戸惑ったなーと思つていたら、壁のような、岩肌剥き出しの崖が現れた。

岩が「ロロロロ」してたのは間違いなく、この崖から落ちてきたものだろ。

…とにかく、落石注意の看板がないかどうか確認した。

なかつたけどね！！

歩いてる途中でみたのは薄汚れてなんか赤茶色の何かが付いたのだけだ。

文字は辛うじて読めたよ？読んだ瞬間に、読むんじゃなかつたって思つたけどね！

そつと元あつた場所に看板を伏せておいたのは言つまでもない。

お蔭でこの森はインスピレーション通り（？）自殺の名所だつて確信したけど。

いらない、いらないよ！そんな確信ツー！

持っていた地図と方位磁石を一旦、背負ったバッグにしまって

「あ、でもなんか良さそうな所みつけ。洞窟、なのかな……？」

崖、といつてもそこは石をくじぬいた用な場所を見つけた。

耳を澄ませば水の流れる音が聞こえてくる。

川のある方へは10m程度なんだけど、木があるせいで川自体は見えない。

「立地条件は優良！ もて、問題はこの洞窟の中、だよね……な、中に黒いのとか仏さんとかが『ロロ』『ロ』してないことを切に願おう。あ、あと熊とかいないといいな」

でから、ズボンのベルト部分にひっかけた懐中電灯を手に取る。反対側の手には相変わらず御守りを握りしめていますとも。黒いのに遭遇しないとは言い切れないからね！

「よし、お、おじやましまーす」

じたことをと体を縮めて、洞窟の中に潜入する。でも、洞窟に足を踏み入れた瞬間、拍子抜けした。

「洞窟つていうよじは“一人用かまくら”って感じ、かも

手を伸ばして少し余裕があるくらいの広さだけど、雨風は十分凌げるし、入り口が凄く大きいわけじゃないから熊は入っこられなりだらう。

こ一ゆーときばっかりは背が小さくてよかつたなーと思つ。人間もいつか伸縮自在になれば素晴らしいのに、なんて咳きながら、天井やら壁やら地面やらを照らして確認を続ける。

変なものはなく、かえつて過ごしやすそうだった。

崖というよりも石に似た質感の壁や天井にあたる部分は特に汚れて

いる訳でもないし、返り血とかそれに類するものは見当たらない。地面だけ掘り起こしたような跡がなければ、死体も白骨も動物の死骸も見当たらなかつた。

「あんまり濁んだ感じもしないし、ここにしようかな。あつたかそうだし、ギリギリだけど足も伸ばせそうだし上々だね。この森にあるんじやなかつたら絶好の秘密基地になるのになあ」

もつたいないもつたいない。

そんなことを呑きながら、歩きながら集めていた枯れ木や折れた枝を寝床に置いてから近くを探索することにした。

川の水を携帯用の小鍋にいれる為に川辺へ向かう。

途中で藪つかなを取つて、編み編みしながら川辺周辺を見渡す。

まだ明るいけど、山の天気は変わりやすいので、さつさと編んでしまうに限る。

ちなみに、編んだ藪は石などで作った囲いの中に仕掛けておくのだ。

上手くいけば魚が捕れる。うまくいかなければ何も取れないけど、明るくなつたら沢蟹さわがにでも探そつと思つ。沢蟹、お味噌汁にすると美味しいんだよ！

あ、調味料も少しだけバッグに入つてた。よく見てなかつたから気づかなかつたんだけど、ほかにも簡単な救急セットもあつたから

1週間はもつ筈。

ふ。なんだか本格的なアウトドアでもやつてる気分だよ。

「目的地にたどり着くころに野生の女になつてたらどうしよう。とりあえず朝一番に魚の有無を確かめて、お湯沸かしたらタオルで体拭こう……髪も洗いたいけど……水が冷たすぎなかつたら最悪川に特攻だな。人もいなさそーだし、すっぽんぽんになつても恥ずかしくないところがいいよね！」

流石に人がいたら一瞬悩むかもしれないけど、人がいないなら悩む必要もない。

バツと脱いで、じゃばつと水浴びだ！

川で水浴びといっても深いところまで行く気はさらさらない。

深いところに行けばいくほど足を取られやすくなるからだ。だから浅瀬から少しだけ進んだ、でも中央に近づきすぎない場所でする。

罠を完成させて、それを設置したら素早く川から上がつて水をくむ。

水をこぼさないように注意しながら、今日の寝床へ戻り鍋にふたをしておく。

虫が入つたら嫌だからね。

「枝、もつがよつと拾つてこようかな。川はいいとして、このあたりも気になるし……黒いの、いないよね？」

安全は確かめておくに越したことはない。

寝ている間に取り囮まれました、残念!とかつていう状況だけは断固しても避けたいのです。

某有名ホラー映画の髪の長い女性みたいなと寝起き一発で遭遇したら昇天できる自信がある。

……かといって、須川さんみたいな美形の顔があるのも勘弁だけど。

普通の起床をすべく、私は周囲探索を決めた。

暗くなつたら嫌なので、歩く範囲は狭くする。
念の為にしつかり地図と方位磁石、非常食が入つたカバンを持っていく。

最悪、戻れなくなつてもこれさえあれば何とかなるからだ。

懐中電灯は装備済みだし、御守りに至っては肌身離さず握りしめて
いる。

「んー、とつあえずは齋威になりそつなものはない、かな？」

相変わざりず、どよみつした空氣だかど他のヒルムツマシだ。

考えたところで答へは出ないんだけど氣になる。

川の近くだから、って訳じやないと思つんだよね。

水自体は綺麗でも空氣が澄んでるって訳じやなかつたし。

本当に変な所だなー、なんて考へながら乾燥した枝を拾いあつめる。

ついでに、お茶にならしき野草を見つけたのでそれも摘んでおいた。

乾燥させるのも遅くなっただけで、煮出せば十分お茶として飲める。

こうこうの知識の源は近所のお婆ちゃんだったり、お爺ちゃんだったりするんだけど……こんなところで役に立つとは思わなかつたよ。

「お。これ確か擦り傷とか切り傷に効くって草だ。ちょっと摘んでこいつかなー。ダメもとで、治らなかつたらそれはそれだ……しつ？」

木の根元に偶然見つけた薬草を摘もうと近づいたまでは良かつた。そもそもって、屈んで手を伸ばしたのもまだまだ問題なかつたと思うんだ。

ちょっとアレだつたのは……偶然目についた薬草のすぐ傍に見慣れた、でも見慣れない生き物が転がつていたこと。

「す……雀って、美味しいんだつけ」

盛大に混乱していた私の口から出たのは、かなり、色々間違った
一言だ。

お腹は空いてたけど食べる気はなかつたよ！ほんとだよ！！

ただ何となく、近所に住んでたお爺ちゃんやお婆ちゃん方がもこも
こでふわふわな寒雀かんすずめを見て懐かしそうに話してたのを思い出しだ
けで！！

遠くから、もしくはそれなりに近くから見た覚えのある、庶民
的かつ愛らしい鳥を私はマジマジと観察した。

木の根元に転がった、両掌に収まるサイズの鳥は雀とよばれる種
類に間違いない。

ただ、ふかふかの羽毛と艶やかな羽が赤茶色で汚れていた。
私から見て右側の羽が広がって、何かにかまれたような生々しい傷
跡がある以外は普通の雀だ。

「すすめー……こんななつてどうしたの。お前さん、ふつー空飛
んでるから普通はがぶつとやられないでしょー」

そつと小さな体を手で掴んで、傷に触らないように地面から持ち上げる。

持ち上げるとほんのり温かかった。

丁度薬草も見つけたし、薬草すり潰したやつを塗つて包帯巻けば完成だ。

効くのかどうかはわからないけど、何もしないよりはいいと思つんだよね〜。

薬草を摘んで、しつかり枝を鞄に結び付けてから雀を両手で持つ。御守りは手首に結び付けてあるから問題なし。

「この森で生きて生物にあつたの、すずめーが初めてかも」

よしよし、と頭を親指で軽く撫でてから駆け足で帰路につく。

怪我をして弱つてゐるすずめーには悪いけど、正直、かなり救われた。掌から伝わつてくる温かさは、氣味の悪い森に一人ぼっちで不法投棄された私にとって神様に近い。

変な黒いのはいるし、鳥の鳴き声すら聞こえない、自殺の名所で動物とはいへ、いるのといないのとでは雲泥の差だ。

無事に元気になつてくれるといいな、と心の底から思った私はまだ、衝撃的な事実に気付かない。

洒落にならない野宿 1（後書き）

かずかぬー、を飼いたことタラモリもじつたのを見たびに田舎こまか。
……ひめじや、雀ふると焼き鳥を田舎こまか。じゅるり

リリメで読んですべりあつがとひいざれこました！

洒落にならない野宿 2（前書き）

そういうえば、数年前、ホラー小説を書いてて半ば憑りつかれてい
たつてことがあります。懐かしいなあ‥。

原因は多分、ネットで見まくっていた心霊写真及び映像。
靈感？そんなものの微塵もありません。

注意：ちょっと、生々しい（流血的な意味で）表現があるので苦手な方は
から下を読まないことをお勧めします。大丈夫だよーん、とおっしゃる方はすずしいーっとお読みください。

何かが争い、食い合つ音を聞きながら墮ちていく…

もともと、辛氣臭くて陽の光が届きにくい森だったのに、どーしてこうこう時だけ色がつくんだと文句を言いたかった。

だつて、お田様が真上に上つても殆ど光を取り入れなかつたのに、沈みかけて異様に赤い夕陽だけは取り込むつてありえないと思う。いや、あつても私は許したくないね！凄く氣味悪いから。薄暗かつた森は、燃えるような赤に近い橙色に染められ、黒みを帯びた木や枝、葉……土に至るまで、まるで血液をばら撒いて乾燥させたような色になつてゐる。

わかり易いのは固まりかけた血、つてところだ。
ほら、うつかり包丁で切つたりとかカサブタが生乾きの時の色。
それが濃淡の違ひこそあれど、容赦なく一面に広がつてゐるんだから不気味だと思う。實際、不気味だし。

「すずめー……おまえもこんな物騒かつ不気味極まりない森の中で大変だつたね。私と違つて空飛べるから自由自在なんだろうけど、鈍くさかつたから力普ツつてやられちゃつたんでしょう？大丈夫だよ、私、生きた鳥は捌いたことないし、捌く予定もないから安心してね」

カラカラの羽毛（まさしく羽毛だ。うん）を指で撫でながら、私は一生懸命話しかける。

正直、自分で何を言つてゐるのかはわからないけど、こんな音のない森で弱つてるのは自分だったら勘弁してほしいもん。多少、なんか色々よくわからなくても音はあつた方がいいと思つただよね！

両手でしつかり雀の体を包んで、私は足早に夕田に照りされた道なき道を歩く。
少ししか歩いていなかつたこともあって、私は比較的早く寝床と決めた場所にたどり着いた。

「……なんだか、何の変哲もない洞窟もどきなのに遠くまつとす る」

やつぱり、すっぽり收まる程度に狭くて寝るのに適した暗さだか

ら?

首をかしげつつ、そつと雀を入れ口付近、一番やわらかそうな土の上に置いて、そそくさと寝袋を広げた。

勿論、とにかく寝袋を広げる下には川辺に行く途中に集めた綺麗な落ち葉や葉っぱを敷いてある。

高そうな寝袋を好き好んで汚すなんて庶民代表の私にはできないんだ。

クリーニング代とか結構高いしもつたいないもんねー。

寝袋を広げて、その横に鞄を置いてからタオルを敷き、ペットボトルとい先ほどむしめた薬草を用意する。適度な大きさの石を見つけたので、鍋に汲んでおいた川の水を少し使って汚れを流す。

それから適当な石を同じように綺麗にしてからゴリゴリ薬草をすり潰せば一応完成だ。

「うわ、なんか薬っぽい匂い！昔の人の知恵ってすごいなあ……私なんかよりも頭使ってるんだろ？」

教えてくれた近所のおじいちゃんおばあちゃんに感謝しつつ、肝心の雀を土の上からそつと持ち上げる。

よしよし、まだ生きてるな。偉い偉い。

親指の腹で頭をなでなでしてから、怪我をしている所にペットボトルの水をかけて傷口をきれいにする。

本当は飲み水のことを考へると川の水を使いたかったんだけど、煮沸消毒もしないのであきらめた。

傷にばい菌が入つて飛べなくなつたら、雀だつて悲しいだらう。

傷といつても、雀の羽だから、そんなに広範囲じゃないから直ぐに傷口は綺麗になった。

「えーと、このできたまやまやのすり潰した薬草をペチゅっと乗つけて… なんか、鶏肉に香草練りこんでるみたいな気分だなー んでもって、包帯でくるくるくくるーっと」

見よつ見まねで包帯を巻いて、救急セットの中に入つていた小さなはさみで包帯を切り、ほどけないように結べば完成だ！ 痛々しい傷跡は白くてやわらかい包帯の下に隠れてしまい、出血もあらかた止まつてたから後はこの雀の根性に掛けるしかない。

よしよしと仕上げに頭を軽く撫でて、綺麗なタオルの上に乗せる。タオルは3枚あつたから2枚は洗つて使いまわせばいいし。

「こしても、真っ赤だなあ…………」これが血殺の名所じゃなかつたら素直に感動もできるのに

そもそも、だ。

私は靈感なんて特殊なものはないとと思う。
今までお化けを見たこともなければ、金縛りにあつたことだってない。
嫌だなつて思う場所はあつたけど、周りの人も同じように感じてた
し私が特別つて訳じやなかつた。

黒いのが視えたのは、間違いなくこの森が特殊な場所だからだとおもう。

ほら、よく怪談とか番組の体験談再現みたいなのである心霊スポットについて不思議な体験をしたり怖い思いをしたりする、アレだ。
あれつて、靈能者の人とかが言うには“たまたま”お化けとかと波長があつて、うつかり見えちゃったのよ～ってな具合らしいし、今回見えたのはそんな感じのものだと私信じてる。

「超能力とか霊能力とかあつたらいいなあ、とは思ひけどソレはソレ、ソレはこれ。実際に見えちゃつたうのは嫌だなー……お目覚め一発、怖いお化けのドアップとか無理だもん、ほんとソレ。トイレの上やら下から髪の毛ふわああああああーーみたいなのも無理。すつゝく無理」

ないない、と思わず首を横に振つた。

盛大な独り言だけど、ほほー曰、超有名な心靈スポットかつ自殺の名所に放置されれば独つ言や懸痴の一々や二二は言こたくな
る。

幽靈怖い、的なことをボヤキながらマツチを取り出してよく乾いた枯葉を乾いた枝の上に置いていく。

それからマッチで火をつけて、フーフーしながら火が消えない程度に大きくなるのを待った。

キャンプファイヤーとかは小学生の時にやつたし、キャンプの経験もあるけど新聞紙やら燃えやすい紙、燃料を駆使してたから、枝と落ち葉だけつていうのは初めての試みだつた。

みるもんだなあ…。
そうそう、マツチつて轟太だ。

火打石とか棒を擦り合わせて火を熾さなきや いけないなんてことに

なつてたら確実に色々諦めてたもん。

「このお茶、結構おいしいかも。緑茶よりのハーブティーみたいな感じ？色も綺麗だし、うん。いくるいくる。あー……きっと練りきりのお供に最適だ。無事にここの森から出られたらここのお茶で練りきり食べよう。そうしよう、もうここの荒んだハートを癒せるのは練りきつせんしかいない」

お茶と共に本日の食事、カロリーメイトをゆっくり時間をかけて食べた。

その後、できることは寝ることだけ。
つまるとかつまらないとか以前にものすごく疲れてたらしく、寝袋の上でぐいぐいと転がれば数分で眠気に襲われた。

ぼーっとしながら、雀の様子を確認して、あぐびと共に田を開じる。

小さな洞窟の中から覗えた景色は、闇に染まっていた。

光は勿論、虫の鳴く声も聞こえなくて、夜さえも溶けてしまつてゐるような暗闇。

寝床にしている洞窟の中は、たき火のお蔭で僅かに明るい。

だからこそ、私は眠りに落ちるまで“本当に”恐怖するところを知らずにいた。

私はどうやらかといえど、よく夢を見て、夢を見たことを覚えていた方だった。

内容はいつも空想と創造、もしくは願望が私の中で膨らませたり縮ませたりしたもの。

大体カラーで、声もついて味もあるし、痛みのよつなものも感じられた。

流石に「コントロールする」とは難しかったけど、小さなころはコントロールもできたから、寝るのが楽しくて乐しくて……。その所為で、友達からは「優ちゃんは良く寝るね~」と言われ、大人からは「寝る子は育つっていうからきっと大きくなるわね」なんて言われた。

言つておくれど、縦にはあまり育たなかつた。横には……うん、もう何も言わない。

とにかく、寝るのが好きだつた私はそれなりに夢のバリエーションだつて知つてる。

怖い夢だつて、見た。

誰かが死んだり、殺しあつていたり、憎み合つていたり、お化けがでたり、幽霊に襲われたり、呪われていたり、なにもなくなつたり。

でも、それはあくまでも夢でしかない。

(な、に……?これ。こんなのは、しらない)

夢の中は、真つ暗だった。

真つ暗ではあつたけれど、そこには音と温度がある。

これは別に珍しいことじやない。

普段よく見る部類には入らないけど、声や温度だけの夢だつてあつたから。

(これは…
だれ?)

強烈な、感情が私に流れ込んでくる。

夢の中の中心はいつも“私自身”なのに、この日の夢は違つた。

“私”の見る「私自身の夢」なのに、“私以外”的「私じゃない誰か」の夢をみている。

暗闇の中で、たくさん声が聞こえてくる。

どれもこれも「苦しい」とか「悲しい」とか「辛い」だとか、拳句の果てには「憎い」「許さない」「殺してやる」「道連れに」などと物騒極まりない色に染まっていく。

そして、最後には生々しい音と共に噛み碎かれ、啜られ、引き千切られ……断末魔の叫びと助けを求める声を残して消えていく。

知らない、私の中にも存在するかもしれない……深い感情。

生々しい他人の声や感覚を借りて私はそれらをただ、傍観していた。

正直なところ、「私」には害なんて、ない。

でも、ううと……だからこそ、怖かった。

自分の夢を、自分の頭を、自分の心をじわじわ乗っ取られていくような恐怖。

私が知らない私ですらない、明らかな他人に漫食されていくような感覚は、どうしようもないくらい怖かった。

(醒めて……醒めてつ、醒めろ……ッ……なにこれ、こんなの知らない！気持ち悪いッ、醒めろってばっ！…)

何度も何度も呪文みたいに、馬鹿みたいに繰り返した。

その間、ずっと『何か』が“何か”を食いつ音だけが響く。

まるでお腹を空かせた動物が夢中で、肉を喰い千切り、骨を噛み砕き、溢れだした血液を舐め、啜る音。

命を、食らひつつす音に私の夢は支配される。

もう、聞こえるのは痛みに呻く生き物だったモノが発する音と、
まだ辛うじて繋がっている誰かの必死に助けを乞う、報われない声
だけ…

洒落にならない野宿 2（後書き）

ここまで田を通してください、ありがとうございました！
うむむ。ちょっとホラー（ホラーか？）っぽさが出てきたような出
てきてないような、微妙な所に突入です。

雀かわいいよ、雀。

洒落にならない野宿 3（前書き）

田指せーせくしーしーん！！

ヒ、掲げている時点で多分、自分は痛い人。

私の悪夢を終わらしてくれたのは、悲鳴でも恨み辛みの声でも

私を悪夢から救つてくれたのは、弱い筈の、強い存在。

なかつた。

小さな、本当に小っちゃくて、「つづすら聞こえただけなんだけど意識するとそれはしつかり私の中に入ってくる。

チチチチチ、とこつ可憐らしげ鳴き声は少しづつ、苦痛に満ちた音を消していく。

完全に聞こえなくなつたわけじゃないけど……でも、親しみやすいその鳴き声にうつかり泣きそうになる。

夢の中だから、泣くことはなかつたけど、でも泣きたいくらいほつとした。

じんわりと体の末端が温まつていぐ。

いつの間にか、冷たくなつていた指に安心感と血液が巡り始めるのを感じて深く、息を吐いた。

まだ、頭の片隅に悪夢の余韻が残つている。
絶対に普段の生活では聞くことができない沢山の声は頭の奥底で、反響して安心感や血液と共に全身にばら撒かれていく。

(手…震えてる)

カタカタと震える手をぱーっとしたまま観察していると、小さな

音がした。

たき火の消えた洞窟の中は外と変わらない暗さで、夢の中みたいに真つ暗だった。

濃淡すらない完全な黒い空間に少しづつ、呼吸が浅くなつていく。

そんな中で、聞こえてきた音のは枯葉が擦れ合つ、独特の軽い音。

枯葉なら、寝袋の下に敷き詰めてある。

そこから聞こえてきた音なら聞かなかつたことにしてすぐに寝るけどできるのに、音が聞こえてきたのは明らかに“外”だった。

「ツ……！」

近づいてくる、そうわかつた瞬間に私はあわてて両手で口を押えてた。

私だつて、こんなことをしたつて相手に息をする音が聞こえなくなるとは思つてない。

音は微かに、でも少しずつ近づいていた。

カサカサと自分の足音を極力消そりとしているような、そんな印象を覚える足取りだった。

私は体をゆっくりゆっくり
心の注意を払つて
音を、たてないよつた細
体を丸めていく。

視線は、外につながる唯一の入り口に固定されたままだ。

見えないのはわかってる。

でも、どうせ口を開じたところで広がるのは変わらない暗闇なんだ
から、少しでも相手の隙を見て逃げ出せる用意しておいた方がいい。
ガチガチとかみ合わない歯が音を立てているのに気づいて、私は
指を歯の間に挟んで音を止めた。

(気づかないで、そのまま、行つて…ッ…)

お願いだから、と入り口をにじみつけた。

鼻の奥がつーんと痛んで、瞳に涙が溜まつていいくのがわかつたけど
それを拭う余裕がない。

余計な音を立てないように細心の注意を払つて、息を殺した。

(あ、れ……？ちょっとま、って。音が、増えてる…？)

増えている、音に戦慄する私を放置して、音は増えていく。

沢山の音はいたるところから聞こえてきている。

それらが目指すのは、この洞窟なのかもしれないと思った瞬間、頭の中に不安が一気に噴き出した。

「（）れやばいよね！？どーかんがえても私、危ない感じだよね？！たしかにこの洞窟は寝るのになょうどいいけど、集会と集合地点には向かない！幹事つ、いるならしつかり場所決めくらいしとけつ！幹事がいないならいいだしつペ！もつとわかり易くていい場所あつたでしょ？！なんでよりによつてここのー！怖いってば！私が怖がつても出るのは涙と鼻水と奇声くらいだつて考えりやわかるでしょ！私より馬鹿だなーつていわれても知らないんだからね！弁解もフォローもしてあげないんだから（）」

怖すぎで、なんだかも一腹立つてきたんですけども！

いつの間にか体の震えは止まっていたので咥えていた指を歯の間から外す。

来るなら来い！と八つ当たり氣味に入り口にいらっしゃるといふと、足音が一斉に止まった。

「（あ、あれ？も、もしかして私の開き直りが通じた？）

それはそれでいいんだけど、緊張と不安がじわじわと戻ってきた。
戻つてこなくともいいってば！ どつかに帰れ、恐怖心！！
ぎゅっと手を握りしめた私の耳を大きな咆哮が突き抜けていった。

「（は……？）」

今のは、なんだ。

あつけにとられて思考を放棄した私の耳に、今度は悲鳴とも絶叫ともつかない声や唸り声、怒号のような音が次々に飛び込んでくる。何かの動物が喧嘩というより死闘を繰り広げているらしい。生々しい音がひっきりなしに聞こえてくる。

いつたい、なにがどうして私の寝床の前で決闘なんぞ始めたのかはわからないけど、今のところは安全だ。

敵が自分の目の前にいるんだから、脇役かつ雑草的な私に構ってい

る暇なんて微塵もない筈だし。

よそ見してゐる間に相手に力プッシュとやられちや堪らないもんね。

最終的に生き残つたのがお腹一杯になつてどつかに行つてくれれば
としあえず、日の目は拝める。

……動物は好きだけど、野生の撻に首を突つ込む度胸も覚悟もない
もんね！

もし外にいるのが犬っぽいのだけじゃなくつて、熊っぽいのとか、
荒ぶつた鹿っぽいのとか馬っぽいのとかだったら間違いなく彼らの
夜食になる。

私はこの森を抜けて、見つけた野草のお茶で美味しい練りきり食べ
るつて決めたんだから死ぬわけにはいかない。どうせ死ぬなら美味
いモノ全部食べて存分に「ゴロゴロ」してお風呂入つて、昼寝してゐ
時にして欲しい。

相変わらず聞こえてくる生々しい争いの音をBGMに、ついさつ
と見ていくことを思い出した。

「（あの時のつて、雀の鳴き声……だよね）」

雀といえば、枕元にいるはずの怪我をした雀くらいしか思い当たる節がない。

つていつても、所詮は夢の話だから枕元の雀が助けてくれた／なんでお伽噺的展開にはならないのが現実だ。

色々と想像力豊かな私でも現実と夢の違いくらいは認識できる！……ときどき、寝ぼけて美味しいものと枕を食べちゃうことがあるけど。

「（でも、仕方ないと思うんだ。だって両手で抱えられるくらい大きくて美味しそうな豆大福が目の前にあるんだよ？！食べないなんて人間じゃないよ）」

「…………ねよ！」

多分、今日はもう何も起こらない。

外に出て確かめるといつのは、ちょっとした自暴自棄。言い方を変えれば、自殺行為。

そもそも、明かりが全くないから何があつても真っ暗で見えないから、朝にならないと何があつたのかなんてわからない。……朝になつても何があつたのかわからない可能性がものす”——あるけど、それはそれだ。

「おやすみー」

あつたことも見たこともない神様はきっと、私に寝ねつていつてるんだ。

もじもじでやべつぶやこで私は寝袋に潜つてみつけて深ご開じ開じ開じ開じ

いた。

田を覚ました私は、昨日作つておいたお茶を飲んで喉を潤して直ぐに外へ出た。

寝床を後にする前に、雀を診たけど気持ちよさそうに眠っていたのでそつとしておいた。

元気になるまで一緒にいてほしいけど野生の生き物なんだから、とつと治して森から出していくのが一番だと想つ。ここ、住むには向

かないからね。

外に出た私は、とりあえず昨日の夢だか現実だか全く判別がつかない時のことを思い出して周囲を確認してみた。

「やつぱり何にもない、か。動物っぽい足跡も、人間っぽい足跡も、毛も血の跡も……むむむ。夢の中で夢みてたってこと?」

そんな器用なマネができるなんて今まで気づかなかつたけど、と少しだけ真面目な顔をしてみる。

いや、誰も見てないんだけど、雰囲気つけてやつだよ。うん。

独り言を呟きながら、探索と調査をやめて目的の川に向かつ。

昨日の罠に魚がかかつているかどうか確認して、居たらお持ち帰り、居なかつたら罠を回収して今日の夜泊るとことの近くに仕掛ける。

次に、川で体を洗う。

正確に言えば、汗とか泥とか汗とか汗とかを綺麗さっぱり洗い流して、ついでに身に着けてた下着を洗つて鞄にぶら下げて歩く。

いや、あの、恥ずかしいよ?—ちゃんと人並みの羞恥心くらいあるよー?

でもいいじゃないか！こ二人なんていやしないんだから！下着が乾くのを待つ暇があつたら先に進んで少しでも早く森から出られるよう歩く方がいいに決まってるじゃないか。美味しいご飯だつて食べられる確率が上がるんだもん、こちとら必死だ。

「つ、つべたい……つ、ううう……でも、我慢できない温度じゃない……夏でよかつた。冬だつたら確實に死んでたね」

裸足になつてそのまま服も脱ぐ。

どーせ誰も見てないんだし、相手は魚だ。跳ねて服が濡れるのは勘弁してほしい。

滑りやすい川底の石に気を付けながらゆっくり進んで腰を覗き込む。

「…いた…………しかも3匹…「わあ、おいしそー…塩焼きにして食べよつーつん。あ、あとこの近くで山菜も探そう。きっとあるーある筈だー！」

きやつぜーーと思ひ存分喜んで、私は先に水浴びを済ませることにした。

魚は一度は言ひたら出られないとひな罠を作つてあるので「飯を食べ逃すなんて危険性はない。

だったら早く身支度を済ませるに限る。

「魚が食べられると思つたらなんか水の温度も気にならなくなってきたーいよーし、今日も頑張つて歩くぞー！明日こまつかるよつて真ん中よつりよつと上までこつてやるー。」

綺麗な水の流れる川で、成人した女が独り言を豪快に言いながら素っ裸で水浴びしてゐるこの状況こそ、たぶん異常だ。しかも、場所が自殺の名所として有名な森の中。

「…………独り言、ひかえようかな」

冷静になつた時、ふと自分の現状を思い出してうなだれた。
私、山を下りるころには立派な野生人になつてるかもしません。
うう……腰に葉っぱとか巻いてたらどーしよう。

気が付くまで、もうすこしだけ……

洒落にならない野宿 3（後書き）

「これまで田を通していくだね」と「ありがとうございます。」

作者としては頑張ってホラーを書いているつもりなんです。でも、あとで読み返すとビーハーしきりもない三流ホラー?になってしまふ。

あれー？（冷や汗）

洒落にならない山登り（漫書き）

本当は続けてアップしたかったのですが、仕事やらなにやらが重なって全く書けなかつた……む、無念…

… 開話とか、せさんでもこいんかなー …… せみたいなー ……

洒落にならない山登り

私の知らない、知らなかつた世界は想像してたよりもずっと近い場所にあつたらしい。

おあずけを喰らつてる犬もきっとこんな気持ちなんだろうな、と火をじつと睨みつける。

川で水浴びをした私は、魚を無事に確保した。

それから、寝床についていた洞窟の入口付近で火を熾し、魚を焼いている真つ最中だ。

じじじじじ、と実に美味しそうな音と共に枝にさした魚が焼けていく。

荷物の中から取り出した塩で味付けして、川辺で見つけた野草は魚

一匹と一緒に鍋の中。

潮汁もどきでも、お腹が一杯になるのはやつぱり汁系だよね。

ぐーと主張するお腹から聞こえてくる音に、空腹感が加速して行く。

生焼けの川魚は食べたくないからものすごく我慢しているナビ、やることにはもう殆ど済ませた。

荷物はまとめたし、お茶のストックも作ったから問題ない。

後は本当にお腹を満たして元気よく歩き始めるだけ。

昨日は変な時間に目が覚めて、変な夢？を見たけどそのあとはぐっすり眠れたので体力的にはなんの問題もないし、あとは川沿いに頑張つて歩けばいいだけなので気楽と言えば気楽だ。

なんの目印もない森を不安まみれのまま歩き続けるのは、体力的に以前に精神的につい。

一人で山を移動するのは、想像以上に精神力がいる。

しかも私の場合、知らない場所にぼーいっと投げ出されて予備知識どころか心構えすらできていない。

そんな山の中で必要最低限のものをうまく活用しながらゴールを目指すっていうのはかなり、大変なことなのだ。いや、楽しんでるついでに楽しんでるんだけど。

「あ、そうだ。包帯かえるよー、おいで」

「チヨンツ」

「地味に賢い雀だよね、偉い偉い」

タオルの上にいる雀は逃げる気配もなく、わざわざつと近づいた私を不思議そうに首をかしげつつ、素直に包帯がある方の翼を差し出すような姿勢をとつてくれた。

人差し指で頭と人間でいうと頬つぺた（鳥で言えば耳のところ）をもしょもしょ撫でてから、取り出しておいた包帯と魚と薬草をとつてくるついでに採取した昨日の薬草をすり潰したもの用意する。

「……あれ？ 何か傷跡がさっぱりないんだけど」

「チチチチ」

「いや、あの、答えてくれてるのはわかるんだけど何言つてるのかまではわかんないんだ、「ごめん。えーと、それで、羽の方は良い感じなの？」

「チユンッ」

「元気そだしだし大丈夫っぽいね。一応包帯は巻いておくけど、明日見て大丈夫そななら包帯は取るから、一足先にこの森から出て仲間と合流してね」

「…………」

ふいっと明後日の方向をむいた雀に思わず首をかしげる。
何か凄く人間らしい仕草で拒否された気がするんだけど、気のせいだよね？
でも、ま。白い包帯が痛々しいけど元気そだしだしー安心と言えばー安心だ。

「そついえば、雀……君、餌は？」

「チチチチ」

「カブトムシとかバッタとかカエルとかコオロギとかゴキブリとかは大丈夫だけど、芋虫系と毛虫みたいなのとか蝶々および蛾は心の

底から無理だからねー。ミミズなんて有益虫だつてわかつちやーーいるけど無理にも程があるつてもんだし、自分でどうにかできそー。」

おそるおそる確認すると、彼だか彼女だか不明な雀は「任せつけ！」的な勢いで鳴いた。

ほつと胸をなでおろして手当を済ませた私は、雀をどうやって運びながら山登りをするか考えつつ、焚き火に向き直る。

香ばしく、とても美味しいそうに焼けているのを確認して、ついでに鍋の方も味見。

うむむ、なかなか美味しい。野草が魚の臭みとかうまい具合に消してくれたみたい。

川魚じゃなくて海魚だともつといい感じになるんだろうナビ、ここは川だから流石に海の魚は泳いでないもんね。うう、美味しい焼き魚食べたくなってきた。

もぐもぐとすかさず魚にかぶりついた私にならって、雀もぴょんっとタオルの上から飛び降りて地面へ降り立つ。

そのままトトトと跳ねたかと思えば、おもむろに地面をつつき始める。

ああ、うん、餌ですね。私の嫌いな類の餌を食べていらっしゃるんですね。了解です。

さりと雀から田をそらして田の前の「」飯に集中する。

昨日は朝ごはんを食べたつまり、カロリーメイト一本だけだったからかなりお腹が空いてたらしい。

よくよく考えると、お腹すいてて当然だよね。

もぐもぐ咀嚼をしながらふと、昨日の黒い影と夢のことと思いつ出

した。

森を歩いているときに見た黒い影は確かに、人の形をしていた筈だ。頭もそうだけど手足だってそれらしいものがあった。まじまじと見たわけじゃないけど、あれは確かに人だの形をしていたと言い切れる。

「（でも、夢に出てきた殆どは獸みたいな、唸り声だった）」

人の唸り声を聞いたことはないけど、あれは間違いない獸の唸り声だ。

悲鳴や絶叫は“人”のモノで間違いかつた。

でも、その発生源はおそらく獸で間違いないだろ？

「（喰い、荒らされてた…とかだつたら私も危ない、よね。まさか日本で動物に頭から食べられるかもしない心配することになるとは）」

たははーと食べ終わつた魚の骨をパラパラとそのへんに散時いて（有機肥料だ！）、鍋を川で洗えば即出発できる。
リュックを背負つて立ち上がつた所で、下から雀の鳴き声が聞こ

えてきた。

「どうやら飯を食べ終わつたらしい。」

「お前、どーしようか。流石にリュックの中に入れるのはダメだろ
うしなあ」

しゃがみこんで、雀を見ると雀も当たり前だといつよつと鳴いた。
もしかしたら私の言葉をわかつてるんじゃないだろうか。
何か言葉でも話すんじゃないだろ？ とかと雀を見つめていると、雀は
羽ばたくマネを始めた。

「ちよつと、ダメだよ…一応まだ怪我人…いや、怪我鳥なんだから
！ あーと、うーんと、肩はあれだし…よし、いいでいいか」

「チュンッ－チチチチチ」

「あててて。もじょもじょダメだつてー！ ジョジョジョ…」

頭の上に雀を乗せてみたんだけど、雀は嫌がる素振りも無く嬉しく
そうに鳴き出した。

流石に頭の上でフンとかはしないと思ひ。 しないことこになー。

いろんな意味での恐怖心を胸に、私は立ち上がる。
歩いてる最中に落っこちたりしないよね？

はじめはヒヤヒヤしながら怖々歩いていたけど、すぐに頭の上の存在にも慣れて順調に歩いていた。

川辺を歩くか川辺に近い森の中を歩くかで少し迷ったものの、結局川が見渡せる範囲で森の中を歩くことにした。川が見えなくなったら、また川辺に戻つてそこから歩けばいい。

そう決めてからは、随分気楽に山登りができた。

「んにつしても、雀すすめーって呼ぶのも味気ないよね。貴重すぎるいろいろ体験を共にしたことを踏まえて親しみを込めて“チュン”って喚ぶことにしたよ。ほら、チュンチュン鳴くし、響きが可愛いと思うんだよね。呼びやすいし」

「チチチチチッ、チュンチュンッ」

「「」めん、抗議されてるのか喜んでるのかさっぱりわかんないよ…
頭の上だから見えないんだ」

頭の上で寂しそうに鳴くチュンに話しかけながら、ただひたすら獸道を進む。

ある程度まで登ってきたのか、徐々に傾斜がきつくなってきたけど、昨日ぐっすり寝たおかげで体力はある。

精神的にもチヨンがいてくれるからまだ大丈夫。

逆に言えば、いなかつたら今の私はかなり極限に近い状態だと確固たる何かを持つて言い切れる！

いや、何かってなんなのかはわからないんだけども。

頭の上にいるチヨンに話しかけながら、4時になるまでは歩くと決めていたのでそれまでは頑張ることにした。時々、5分小休憩や飴を食べることで疲れをやり過ごしながら進もうと決意したのは確か数時間前だったと思う。

実際、岩っぽいものや倒れた木を跨いだり登ったりしたけどそれなりに順調だった。

“それ”を見てしまうまでは。

「……す、須川さんのばか……」

地面に手をついて頃垂れた私はここで初めて、入る会社を間違えたと心から思った。

洒落にならない山登り（後書き）

やつとひゅしたのになんだらうの短歌。無念すがむ。

行き当たりばつたりにも関わらず、目を通してくださいて本当に嬉しいです。ありがとうございました！

P.S. お気に入りがまた増えました。すっごくすっごく嬉しいのに、なんだか申し訳ない気分で悶々です。精進します、ええ、頑張りますとも！

洒落にならない発見（前書き）

正し屋を書くたびに「優（主人公）じゃなくて本当に良かつたな
なんて思う作者は多分何か間違ってる。

見てしまったものを、見なかつたことにつきればことと心から思
う。

山に放り出されてから、今日で2日目。

まだたつた2日目だから生きているのは当然として、チュンといふ
可愛い同行者も増えた。

不可解かつ不気味なものに遭遇したりもしたけど実害はないし、た
だ寝ぼけてたつてことも考えられるからなかつたことにしている。
唸り声とかもその原理で空耳として処理した。

だつてもし、幽霊だつたよーんとかつてオチだつたら怖すぎれる。

ただでさえ“自殺の名所”で、知る人ぞ知る“心霊スポット”という特殊すぎる場所に一人つきりで放り出されて容量オーバーしまくつてるので、未知との遭遇が加わつたら確実にパーントつてなる。頭的な何かが。

「……チヨン、これは、どーみてもビジネス的なバックですよね」

ちゅん、と頭の上で小さな鳴き声。

鳥類に聞いたつてわからないのはわかってるけど、聞かざるおえな
いこの状況。

急斜面の山を登つた所で、発見したのは見慣れてしまつた森に強烈すぎる自己主張をしている物体。

何が怖いって、自然の森つて雰囲気が丸出しのところにポツーンと妙に綺麗なビジネスバックがコロソと転がつてゐる。

しかも、その横には靴らしきもの。
おやおやおや、カバンが置いてある上を見る。

「（よし、いない）」

ほつとため息をついて、恐る恐る近づいてみる。

へっぴり腰なのは仕方ないと思うんだ。

腐りかけた人間とか見たくないのはきっと全人類共通だろーし。

ビジネスバックが置いてある横の草むらを覗き込むと、そこには、想像どおりの、でも想像とは少し違った形のものがあった。いや、モノつていつたらばちが当たるかもしれないから訂正しておくけど。

「……腐りかけてないにしても、人骨も、ちょっと……いただけないと思つ」

ちゅん、と上から同意するような鳴き声が聞こえてきて私は思わず「そうだよねー」なんてつぶやいた。

黒いスーツは汚れは目立たなかつたけど、Yシャツは薄汚れている。ただ、靴下に泥がついてないのは少し不思議だった。
靴脱いで歩いたなら普通は泥、つくよね？

「遺書っぽいものもない……って、なんか、胸のところに刺さつてた形跡がある、よーな？」

どばつと冷や汗がいろんなところから分泌され始めた。

頭の中で流れているのは水曜サスペンス劇場で流れるテーマソング。咄嗟に思い浮かんだのは『エリートサラリーマン謎の失踪！・雲仙岳の裏の顔と隠蔽された過去！』というサブタイトルの殺人事件。うわあ、つてことは私もしかして探偵のことしなきゃいけないのかな？

ミイラや腐りかけた死体、生の死体はちょっと嫌だけど白骨になつていればあまり怖くない。

ほら、骨格標本とかあるでしょ？友達でちょっと変わった趣味の彼氏さんと付き合って、プレゼントで人体模型と骨格標本を貰つたらしい。友達は医療関係の勉強をしたから助かつたみたいだけど、私だつたら美味しいケーキを貰つたほうが何十倍も嬉しいんだけど。

「と、とりあえず地図に丸つけて……つと。後は免許書と時計とか携帯とかあればそれも持つていって警察に渡したほうがいいよね。流石にこのまま放つておくのは気が引けるし。これ、ちゃんと家族の人へ渡しますから、安心してください」

南無南無、と手を合わせてからビジネスバッグの中をあさる。声をかけたのは、化けて出られるのが怖いからだ。やだよ、目覚めた瞬間にオバケのドアップとか！

カバンを漁つていると財布を発見した。

中には少しのお金とカード類があつたので免許書を抜き取った。遺留品の一つとして持つていくのは、[写真入りの手帳を見つけたのでそれにして。

それ以外は手を付けずにそのまま置いておく。変にいじると証拠とかが消えちゃうって、はきもの刑事がいってたもんね！

遺留品はひょいひょい良くなっただらうとバッグの中にあつた未開封の封筒があつたのでその中にいれた。

これでリュックの中でバラバラにならなくて済むよね。

免許書をちらつと見たけど、20代後半から30代前半の中々かっこいい男の人だつたらしい。

「うーん……自殺っぽくはないけど深くは関わりたくないな……あー、なんか、ぶら下がってるんですけど」

眩きながら歩き始めて、30分程度たつた頃、今歩いている所から50㍍ほど離れた場所に見えたモノに思わず顔がひきつった。

鬱蒼と生い茂った木々のから偶然に見えたモノは、昨日見た黒い

影とは違つと直ぐに分かつた。

あの黒い影は揺れないだけじゃなくて……って、あれ？あの

黒いのって服、とか身に付けてなかつたような気がするんだけど。

それに気づいた瞬間、ブワッと鳥肌がたつた。

ついでに悪寒も感じた所でわれに帰つた私は、慌てて腕を擦る。

薄ら寒いっていうかなんというか…凄く気づかなきやよかつたと思つた。

「いぐ、べきだよねー……な、生っぽかつたらヤだなー…せつかみ
たいに骨っぽい感じになつてたら夢にも出ない、筈なんだけど。白
骨つて近くで見ても標本見てるみたいでなんか怖くないし」

流石に、骨格標本を送られた友達の部屋になんども泊まつてれば
慣れる。

はじめはびっくりしたけど、服とか着てて完全にインテリア扱いだ
つたし……慣れつて怖い。

朝起きた時に、顔の真横に倒れてきたらしい骸骨の顔面があつた
時は「近所迷惑も考えずに大絶叫しちゃー…誰だつてそうなる
と思つんだよね。

でも結局放つておくのは後味が悪いので恐る恐る、近づいた。

お決まりのように足元に手提げ鞄があつたからそこから免許書と時計を預かつた。

これはポーチにいれさせてもらひて、同じように地図に場所を書いておく。

「……わたしはなにもみてない、ほんとうになにもみてない、血の氣のない真っ白い足っぽいのとかハイヒールとか黒くて長い真っ黒の髪の毛がだらあーつてなつてたりとかそういうのはぜんぜんまるつきりなんにもみてない」

自分に言い聞かせるように呟きながら、本来の道に戻る。

一応田印でチュンとチュンのベッドになつていたタオルを木の枝に結びつけておいたので迷うこともなく無事に帰れたんだけども。精神的にぐつたりして帰ってきた私を出迎えてくれたのは、癒しの塊のチュンだった。

心配そうに首をかしげながら私の表情を伺う健気すぎる姿につかり泣きそうになつたのは内緒だ。

動物ではあるけど、心配してくれてるってだけで嬉しい。

「チュン、モーーの森ヤダよーーー今なら『翼をください』って

曲作つた人に勲章贈れる！本氣で翼が欲しい… びゅーんとひとつ飛
びで「ホールしたい」

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ୍ ଓ ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

「慰めてくれるの？いい子だねえ…ありがとう。も、もうちょっと頑張る……あ、あれだよね。マネキンか蠅人形的な何かだと思えばきっとーー！」

リュックを背負い直してから、チョンを頭の上に乗つけて再出発。

この時は明るい歌を無理に歌つてテンションをどうにか上げようとしたり、好きなもののことを考えたりしてどうにか気を紛らわせることができたんだけど…やつぱり、心のどこかに視界に入った光景がずっと引っかかっていた。

洒落にならない発見（後書き）

短いですが、一回いいで区切りです。
ここまで読んでくださってありがとうございました^ ^

洒落にならない発見2（前書き）

牡蠣が食べたい。ものすゝじく、ものすゝじーく、牡蠣が食べたい。

牡蠣の酒蒸しと牡蠣フライが食べたい。でも、生は食べられない…

でも、殻つきの牡蠣は高い…お金、ない。ぐすん。

がつくりと、私は綺麗な落ち葉の上に崩れ落ちた。

時間は丁度4時を回ったところ。

遠くの方からカラスが騒ぎ立てる声が聞こえてくるけれど、それも長くは続かなかつた。

耳を澄ませると川の音が聞こえてくるから、川からそう遠く離れていないのは間違いないんだけど…明らかに今までとは違うものが目の前にそびえ立っている。

「なんでこんな所に鳥居があるんだろう？神社っぽいのがあるわけでもないし、お寺っぽいのも見当たらない……よね」

周りの景色は、鳥居がある所為か、木が生えていない。

住宅街にある最低限の遊具しかない公園のよつな広さがある。砂場と滑り台、後はブランコ位なら設置できそうだなーなんて思いながら周囲を見回して、鳥居の奥に灰色の何かが見えた。

所々、色が剥がれた朱色の鳥居の奥にあつたのは、苔が生えた犬の石像。

狛犬と呼ばれるものだと気づいたのは、少ししてからだ。

苔に覆われているせいで全体の形はわかつたんだけど、表情が全くわからない。

何となく座つてるのがわかるシルエットと、耳の具合とかで犬だろうと見当をつけただけだから本当はお稲荷さんかもしれないけど。

「今日はもういいや……疲れた」

脳裏をよがるのは「」したどり着くまでに見た数々の、死体。

死体つていつも殆どが骨になつてたけど、中にはまだその、新しいものなんかもあつたりしてガリガリとMP的なものを削つてくれた。

腐敗臭っぽいのがなかつたのが不幸中の幸いなんだけど、正直、かなり喜べない。

流石、自殺の名所として有名なだけはあるよねー、なんて言いながら薄ら笑いが浮かんだ。

「でも、明日の朝、魚がいっぱい掛かつてれば立ち直れるかもしない」

楽しいこと、楽しいこと…とそこまで考えた結果、そこにたどり着いた。

見ちゃつたものはもう忘れるか、気にしないことにするしかない。ただでさえ、不気味で薄暗い森にいるんだから気持ちだけでも、前向きにいかないと！

「…本音？本音は、自分も木の枝に垂ぶらりんになつたり、包丁でべつさりで人生を終えたくないんだ。」

まだ甘いものも死ぬほど食べてないのに死んでたまるか！

「チヨン、今日はこのワン」「さんの横で寝よつね。狛犬って確か神社とかにいる守り神的な偉い生き物だった筈だから、黒っぽいのとかもどうにかしてくれるかもしれないよ」

「…ひゅん、ちちちちち！」

「……なんか、鳴き方にばりえーしょんがでてきたね、チヨン」

「ちゅんちゅんっ」

相変わらず可愛らしい鳴き声だけ、チョンがなんとなく呆れるのはさつきから伝わってきてる。

そりや、頭の上でチュンチュン言われ続けたら、はんなりとは分かってくるものですよ。

嬉しいような、切ないような…。

宣言通り、狛犬らしき石像のすぐ横を寝床と決めたら後は昨日のように枝を集めることから始めた。

枝拾いのついでに川から水を鍋に汲み、集めた枝で火を焚き火をする。

周りに木はないから山火事になるなんてことはないと思つ。

「元々、森が暗いせいであつという間に真っ暗になるね」

「ちゅん」

焚き火が安定した時点で、もう当たりは闇に包まれ始めていた。

黙り込むと静寂が当たりを覆つて、時々聞こえてくる音は焚き火の爆ぜる音だけ。

パチパチという音は枝に含まれていたらしい水分が蒸発する音だと

昔何かのテレビでみたつけなー、なんて思いながら川の水を沸かして作ったお茶を飲む。

夕食のカロリーメイトをこねり食べ終わったから、疲労回復のためにぐっすり寝れば一日が終わる。

狛犬の横に寝袋を敷いて、ごろんと横になつた。
芝生のような草が生えている御陰で、ふかふかのベッドまでは二
かないまでも快適に眠れそうだ。
くああ、と欠伸をしてから寝袋のすぐ横にひょいと座つてこむチ
ュンの頭を撫でてやる。
気持ちいいのかグリグリと自分から頭をこすりつける仕草は何度見
ても癒やしだ。

「そりにえば、包帯取るの忘れた。おいで、包帯とるよ

「チチチチチッ！――

「そんな抵抗しなくても……もしかして包帯とったくないの?」

「ううううう――

「……図つたよしなタイミングで鳴くな、おまえは。まあ、こいや。

畠田の朝には包帯となるからね?」

「……ちゅん」

少し遅れて返事らしき鳴き声を返した野生の雀はピーンピーン小さく跳ねながら私の顔のすぐ横で眠る体制を取り始めた。
…本当に、野生、だよね?なんか、田覚めた時から野性っぽさを微塵も感じてないんですけど。

私よりも先に寝始めた臆病であるはずの野生雀を観察してみたけど、答えは出そうにないので諦めて寝ることにした。
一日中歩きっぱなしだったことや、精神的なダメージが自覚している以上にあつたみたいであつという間に眠りに落ちた。

だから、疲れや睡眠欲によつて注意力が普段以上に鈍くなつていて私は、頭上から熱心に視線を注がれていたことにも全く気付かなかつた。

つこでにこうなら、眠っていたはずのチヨンがパチリと田を開いて
じっとその視線の主を観察し始めたことに気がかない。

だって、ほり、寝あとだつたしこれで氣づくまうがどうかして
とおもうんだよね！

洒落にならない発見2（後書き）

み、みじかい！！（汗

最近リアルが忙しくて1日～2日づつはかなり難しい感じになります。

ストックとかないからなあ… o_rz

次は普通通りの長さでかけることを祈っています。がんばります、
はい

んでもって…やっぱり登場人物が人間1人と雀1羽つて厳しいです
（爆

ここまで読んでくださつてありがとうございました！
そして、アクセスしてくださいありがとうございます！

開話 観察とこのよつ壇みの見物（前書き）

ちよひとびとがかつ変化をつかひと細ご、今まで殆ど出番のなかつた上回様サイドのね話を挟んでみまや。

れつ・せんじこつひーーー。

巡り逢うべくして巡り逢った のかもしれない。

持っていた筆を置いた所で、今日処理すべき仕事が片付いた。

墨が僅かに残っている硯と筆を手に専用の洗い場へ向かう。
硯と筆を片付けたら風呂に入つたら眠るだけなのだが、店が終わつたら電話をすると雅が言つていたのでそろそろ電話がくる筈だ。

手を動かしながら、普段とほとんど変わらない作業を終えて風呂場へは向かわずに事務所の椅子に腰掛けて、冷めてしまったお茶を一口飲み下す。

「……：経歴は一般的、家族構成はやや特殊ではあるものの特筆すべき問題はないようですね」

机の上にある履歴書と“報告書”に目を通しながら、自分の目で確かめた情報を追加していく。

出会いは珍しい不注意からだった。

考えを巡らせながら歩いていた私に、彼女がぶつかったのだ。

私は衝撃は殆どなかつたが、少し驚いて視線を下に向けると地面に手を付いたスース姿の幼顔の女性がいた。

状況を理解していないのか、口と目を開けて呆然としている様は、中々面白い。

周囲には、ぶつかつた衝撃で投げ出されたと思われる男性用のビジネスバッグと草^{くたび}臥^{うつ}れた求人誌があつた。

物思いにふけっていると、電話のベルが鳴る。

時計は、10時を回ったところだ。

仕込みを終えて一息ついた頃だろうと推測しつつ、電話を取る。

「もしもし？」

『遅くなつて悪かつたな。あー、今大丈夫か』

「ええ、仕事も片がつきましたし、契約に必要な諸々の手続きも明日には完了します」

普段の仕事は8時前後には終わる。

今日はそのほかにも臨時の仕事があつた為に遅くなつたが予想の範囲内だった。

『つはー…相変わらずだな、お前は。完璧すぎんのも大概にしねえーといつかザックリやられんぞ』

「貴方と違つて日頃の行いがいいので大丈夫ですよ。で、要件はなんですか？十中八九、彼女のことだとは思いますが、一応聞いておきます」

『わかつてんなら聞くんじゃねーよ、つたく、嫌味な奴だな。……なア、本当にあのちまつこいのを雇う氣か？』

「そのつもりですよ。雅みやび、あなたも気づいたでしょ？彼女は“こちら”の人間です」

こちら、というのは“見えない”人間やそういうしたものとの縁が薄い人間ではないことを言う。

簡単に行つてしまえば、江戸川 優という女性には肉体を持たぬものとの縁があるということだ。

一般的に、こちら側ではない人間は、私たち“見える”人間にとつて一番厄介で扱いが難しい。

“見える”的なら余分な説明は不要であり、予備知識がなくとも1を見れば、2もしくは3くらいまでならば理解できる。

これが“見えない”人間ならば、1もしくは0から説明をしなくてはならない。

中には言葉で説明しても理解しようとしている者もいる。

こういう人間は自分自身に命にかかる実害が生じなければ決して理解しようとしているのだから面倒極まりない。

『そりゃー…まあ、店に入ってきた時点でわかつたけどよ。ありや、どーいった特性持ちだ?俺らの系統じやねエつてことだけは確かだが』

「名刺の色は無色透明でした。私のような系統でもないでしょうね、近しいものは感じましたが」

『……オイオイ、お前さんでもわからねえのか?…!』

「私にだつてわからない」との一矢一矢はありますよ。ただ、“彼ら”曰く彼女の傍はとても屈心地がいいそうです。興味深いことに、神仏クラスの方もかなり好意的で、式になつてもいいと言い出したものもいました。理由は靈力が好みだから、とのことだったのですが……

『なんつーか、神つてそんなんでいいのかよ』

「神によりますね。私の知つている方々はかなり人間に近いところ
で暮らしていたこともあって、神という括りの中では変わり者に部
類されていますが実力はありますよ？」

受話器の向こうで聞こえる唸り声の御陰で彼の心境を推測し、た
め息を吐く。

この黒山 雅という男も十分変わり者ではあるのだが、当人は全く
自覚していないらしい。

山を降りて日常生活を営んでいる僧侶は少なくない。
けれど、大抵が寺や神社といった家業を次ぐか一般人に混じって就
職し静かに生活しているものが殆どだ。

中には靈媒師や霊能力者などと名乗り仕事をするものもいるが本物
は数えるほどしかいない。

大概は“見える”だけであったり“感じる”だけしかできないもの
ばかりだ。

「どちらにせよ、本物になるかどうかはいろいろ試してみないとわ
かりませんからねえ」

『試すつて……、もしかしてお前ッ！―またあの無茶な方法で力を引き出すぞうってんじゃねーよな？』

「“あの”とは“どれ”のことですか？」

『真冬に滝修行1週間と護摩焚き修行1週間ぶつ 続けはないだろ。あと、ど素人に靈場で山伏修行はなア……お前、真面目に教える気なかつただろ。ずぶの素人を放り込むのは命捨てるつってるよーなもんだろーが』

「命を捨てる覚悟があると宣言し、契約したのは彼らですしこれでも退避できる状況も整えていました。事実、あれに耐えられればその後の修行にも耐えられるでしょう？」

『お前の修行はただの鬼の所業だ。修行じゃねーよ』

「私も始めは一般的な修行内容を紹介しましたよ。ですが、どうしても短期間でと言つたのは彼らでしたし、必ず修行をして身に付くものではないことや忍耐力や強い意志が必要だと伝えました。そ

れでも、と無理を言って修行を承諾したのですから自己責任でしょう？」

正し屋にくる人間は大きく分けて二通りいる。

まずは、依頼人と呼ばれる本来の仕事を持ち込んでくる方たち。彼らが居なければ商売は成り立たないので、基本的には歓迎している。

中には無茶を言ってくる方もいるが、こちらで定めた契約を破らない限り“客”として扱う。

問題なのはもうひと通りの人間たちだ。

彼らは依頼人としてこの店にやつてくるが、どれも契約に違反する依頼を持ち込んだり、話にもならない要求を突きつけてくる。大抵、話が通じないので実力行使に出ざるおえない。

雅が挙げた修行の例は、実際に修行として行われていることだ。

ただし、意図的に体力的にも精神的にも厳しい内容にした。実際、厳しいのは稀にある“本物”や“当たり”と呼ばれる質の悪いモノが相手になった時だ。

見えなければ避けることができず、退ける術と力がなければ引き込まれ、知識がなければ対策を練ることも実行に移すこともできない。

その先に待つのは、恐怖か死か多大なる代償。

『まあ、あの連中に聞いて言ふまへりとつてもいい“見せしめ”になつたけどよ。アレをあのちみつここのこやしねーよなア？』

「彼らと彼女とでは前提が違います。そもそも、勧誘したのは私ですし、色々と興味もありますから悪いようにはしません。まあ、じつくり時間をかける余裕もないのに少しばかり強引な手段に放ってしまいますが黒と白を付けるので死ぬようなことはないでしょう」

恐らく、心中で付け加えたが口に出さない。

それから暫く情報を交換してから電話を切った。

時計をみると十一時になる十五分前で、かなり長い間話し込んでいたこと元気づく。

「やれやれ……明日から、賑やかになりますね」

風呂場へ向かうべく腰を上げた私の視線に飛び込んできたのは、
彼女に“支給”する道具だった。

正し屋の事務所にはそぐわないそれらを受け取った彼女の反応を想像するだけで口元が緩む。

彼女はきっと、私と私の日常を変えてくれるのだろう。

ましょうか？

さあ、高みの見物といき

闇話　観察とこのよつと重みの見物（後書き）

ひとつあえず、こんな上司嫌だ。
怖すぎる。

読んでくださいありがとうございましたーー。

洒落にならない遭遇①（前書き）

タヒーなるとおでんが食べたくなります。

ちなみにおでんの具ではないにやくが一番好きです。一番手は竹輪。
こんなにやくつていえば白このよつ黒いの方がレアっぽい気分になる。

この日も変な夢を、みた。

始まりは真っ暗で、ぽつーんと暗闇の中に私が立っていた。

昨日もこんな感じの夢をみたからわかるんだけど、間違いなくこれは夢だ。うん、夢だ。

私の頭にあるのはこれが“夢”だという安心感。

目が覚めて真っ暗で……う、もうやめとこひ。昨日のはあれだよ、大分寝ぼけてお腹の虫が鳴らした音を誤変換したんだ！耳とか頭とかが！

「にしても、こんな服持つてた記憶ないんだけどなー…… 来てる服はズボンだし」

自分の足と来た覚えのない白いスカートがひらひらしている。スカートなんてめったに履かないから、スカートの柄とか色くらいなら覚えてる。

「メルヘンな服着る夢を成人し終えて見るとは思わなかつたなあ」

じーっと白スカートを見ていると無性にふわふわスポンジのショートケーキが食べたくなった。

クリームは甘めがいい。

で、スポンジの間には生の苺をしつかり挟んで、一番上には大粒の真っ赤な苺を所望します！

仕上げに

アールグレイにミルクを少し入れて、一緒に食べられたら例え自殺の名所だろーが、オバケがいっぱいいる廃屋だろーが立派な当分補給の時間になる。間違いないね、うん。

お腹がすいているらしい私の思考は、あつという間に甘いものに傾き始める。

時々、焼き鳥とかラーメンとか食べたいなーなんて思つたりもしたけど、サイドメニューです。

甘いものばかりだと舌が甘いのに慣れちゃひからねー

何も見えない闇の中で意味も無く一や一やしていた私は、ふと違和感を覚えた。

周囲を見回してみると、真っ暗なままで変化はない。
自分の体（といっても目に見える範囲だけ）を確認してみたけれど、足が細くなったり背が高くなったりそーゆー変化もない。

そもそも、違和感つていつても、ただ何となく“あれ？”って思つただけで根拠はないし、私に何かがあつたつて訳でもない。

敢えて言つながら、ポンッって頭の上に電球が現れた感じ？
なぞなぞの最中とかでもないんだけど、本当に何か、パツと何かがピコンッてきたのだ。

「なんだつたんだろ、さつきの感じ。特に変な感じはしないんだけどなあ」「

変なの、とボヤきながら髪を「」いや「」と搔き回してみる。

髪の毛がボサボサになつたけど、もとよりボサボサだつたから気にはない。

それから少し考えてみたものの結局とにかく当然といつか、答えは出なかつたので考へることを放棄した。

は一つとため息をついたところで、遠くの、でも頭の中に響くような声が聞こえてくる。

ノイズの入つていない、調整不良のラジオを聞いているみたいな感じ。

声の感じからして男の人だつてことはわかるんだけど、それ以外はわからない。

でも、暗くて重い。

墨化したホワイトソースみたいな、ドロドロしていく元の、本来のモノには戻らないような状態。

反射的に、聴きたくないと思つていたらしく耳を塞ぐように手を当てていた。

く……て、……ば、……んだ……く

聞くな、聽くなと念じても、それは頭の中に響いてくる。

耳を塞いでも駄目なのだと分かつてしまつて、仕方なく手を外した。
どうやっても聞こえてくるなら、諦めるしかないよねー。

開き直つてしまえばこいつのものだ。怖いものなんてなーんにも
ない！

「セト、どうからでもかかつてこーーー！」

< ど し て 、 お れ ば り 、 こ な め
ん だ ? ! >

「……すいません、めんなさい、撤回します、かかってこないでください
後生ですかーーー！」

前言撤回します！

言わなきやよかつた、言わなきやよかつた！猛烈に後悔をしながら思わず後ずさる。

でも、真っ暗だから下がっている感覺はあっても、下がっているのか進んでいるのかはわからない。

本気で勘弁して欲しいんですけど、心の中で盛大にボヤいた。

「…………？」

215

「俺は悪くない！俺は、俺は何にも悪くないのこなで、ビリッて……ツ――」

思わず、知らんがな、といいそうになつたけど、でも、辛い時や苦しい時にこんな風に思つてしまつことがあるのは知つてゐる。

私だつて、似たようなことを思つたことがあつた。

「じつして、なんで、私だけ？そんな風に考えるのは、周りが見えてな方からだつて今なら言える。

けど、その時の私はわからなかつた。

自分の気持ちの整理が追いつかないまま、現実だとか問題だと嫌なことばっかり積み重なつて、上手く息を抜くことができない状態だつたから……周りを見る余裕なんて、ある筈がない。

そもそも、そんな余裕があつたらモーゆー自身に陥つてないよ。

「じつにもならないなら、じつてもならないなりの対応があると想うんだけど……」

「俺は悪くない、俺は間違つてなんかない……じつして、なんで

俺だけ……ツー！>

「ダメだ、聞いちやいねーですね」

< 私の、なにが悪かったの >

「しかも、なんか増えてるんですけども」

< アイツのせいでの、アイツされ……アイツされ居なければ……ツー！>

「……なんか、大分、まずい雰囲気の夢、ですねー……」

「ぐり、と思わず生睡を飲む。

夢なのにものすごく嫌な危機感を覚えるんですけど…？

反射的に引きつった口元と完全なるへっぴり腰で私の感じた危機感的なものが表現できると思う。いや、無意識なんだけどね…！リアクション芸とかじゃないんですよ。

いつの間にか真っ暗な闇の中に沢山の光が浮かび始めていた。

気付いた時は3つだった、小さな炎みたいな光は点々と、数が増えていく。

それらは私を取り囲むように数を増やし、どんどん大きなものへ変化している。

はじめは、蠅燭の炎位だったのに手の平大にまで成長し……色も毒々しい赤色に染まっていく。

色が変わること自体は、少し嫌だなとは思つたけど恐怖を抱くことはなかつた。

ただ、赤くなつていくのに比例するみたいに、声がどんどん洒落にならない感じになつてること以外は。

始めに聞こえた男の声は支離滅裂になつていて、もはや言葉ではない。

次いでも悲しそうな女性の声は恨み辛みに代わつて今にも良く心靈番

組とかで見る怖い女の幽霊になりそうな雰囲気だ。髪が長くつて、にたつて笑うかゆらあへと出でくる感じの怖い奴ね。

あれが声を出したらこんな感じだと思つ。

そして、最後に聞こえたハツ当たり氣味な男の人の声はもはや、言葉ではなくなつてゐる。

(早く、田を覚まさないと… シーーこれ、昨日のセジやないよね…
?—)

冷や汗を大量にかきながら、必死に考えた。

夢の中で冷や汗をかく羽田になるとはおもわなかつた!…とかなんとか思いつつ、一心不乱に起きろ起きろとまだ寝ているらしく自分を叩き起す勢いで念じるけど起きる配は全くない。
どんだけ眠ってるんだ私!^{のんき}暢気にぐーすか寝てる場合ぢゃないでしょ!!本人(夢だけど意識がはつきりしてゐるから本体?)が起きろつて言つてゐるんだからちやんと起きて…

うがーとしゃがみこんで真つ黒な地面(一応立つてゐるし地面でいいともひ)をベシベシ叩きながら半泣きで泣き叫んだ。

もう恥も外聞もあるか――――――！と口あえず起きて――――――！

洒落にならない遭遇1（後書き）

そういうえば、昔、夢の中で怖い夢を見ても自力で強制終了がかけられました。

…今はもう、そんな器用な真似はできません。

ここまで読んでくださってありがとうございました！
結局ストックは出来なかつた……明日頑張ります……。

洒落にならない遭遇2（前書き）

犬が好きです。

しかも、小型犬じゃなくつて中型～大型が好きです。
柴犬は文句なしに可愛い。

大型犬はゴールデンレトリーバーがいい。

きつと生き物は、一人では生きていけないよつに出来ている。

私は今、炎の中にいた。

正確には炎のようなものに囲まれていて、だけど。

夢の中で焼き殺されるなんて正直、御免ごめん被りたいけど、その可能性は大いにありえるので正直笑えない。

ぐるりと私を取り囲んでいる炎（この場合は人魂？）の中には赤黒くなっているものもあった。

赤黒いものの一つに注意していると、唯一赤黒さを残していた中心部分の色が濃くなつて……闇に溶けてしまいそうになつた、そのタイミングで突然、焼き消えた。

真つ暗な景色に同化したのかな？とか見間違いかもしれないと思つたりもしたけど、どちらでもないことはスグに分かつた。

恨み辛み、妬みや呪いの言葉に紛れて聞こえる、悲痛な、もしくは声にならない絶叫。

驚いて周りと見渡すと、なんとなく目に止まつた大きな橙色と赤の中間といった色合いの人魂が、散つて消えた。ぐにやりと上下に潰されて、飛び散つた小さな火が消えるより早くソレはこの空間から永遠に消えてしまつ。

（なんか、今のは……なにかに、食べられちゃつたみたい、な）

何となく、近所の犬が大きなお肉を嬉しそうにガブリと食べた時のこと思い出した。

確か、山で迷子になつていた飼い主を見事見つけて、救助隊を呼んだご褒美、だつた氣がする。

あんまり高くはないお肉だとはいつていたけど、豚だか牛だかのお肉の塊だつた。

それにはかぶりついて、嬉しそうに尻尾を振つてたつける可愛か

つたなあ。

つてそれどころじゃないよね、この状況！

ぱつかりと空いたスペースには、いつの間にか別の人魂が浮かんでいた。

それは弱々しい橙色だつたのに、周りの影響を受けてかじわじわと外側から赤く変色していく。

水彩絵の具が溶け込んでくような不思議な光景。

きっと、こんな状況と火が人魂っぽくなれば綺麗だと思えるんじやないかなー……普通にキャンプファイヤーとか花火とかそういう系統だと本当に綺麗だと思う。大変そうだけど。

ポカーンとしている間にも私と人魂の距離はじわじわと縮まって、1m近くはあつたはずの私とひと玉との距離は半分は確実に縮まっていた。

嬉しくない。ものすごく嬉しくないーー

「つて、ちょっと待つたー！さっきから食べられてる頻度高くなつて

ない！？「つか、色が全体的に黒ずんできてるよーな……黙つぽい声も、うつすうだじうか明らかに混じってるし」

勘弁してください。本当に。

夢の中なのに、夢の中だって分かつていてるのに物凄くリアルな危機感を覚えた私は再び一心不乱に目を覚ませ目を覚ませと祈った。祈る通り越して、もうなんか念じまくっていた。下手したら一種の呪いだ。

「う、うわあああああん……もーなんで目H覚まさないの…私の馬鹿！寝に汚いにも限度つちゅーもんがあるでしょーが！！本体的な私から起きろって指令が出てるんだからちやんと起きてよおおおおおーー一度と井の中に甘いものいれてやんないんだか…………ひいいいいいい！！ちょっと、ちょっとまつて火の玉！…さつきより近づくペース早くなつてしません？！当社比で確実に1.5倍は早くなつてますから！マジ勘弁！ほんとにすいませんごめんなさい！私日頃の行いが特別悪いわけじゃないんで見逃してください、なんなら毎日なんかしますから！一日3回は食べてたオヤツも1日1回に減らすからああああああああー！」

ゅーるーしーてえええええーーと半泣きになりながら土下座をした。

誠意を表すのに土下座は最上級のスタイルだつて死んだおじいちゃんが言つてたもん！ 酔つ払うと必ず「ばーさんに“ふろほおず”した時もこれが一番聞いたんだぞ！」ついていつてたーばーちゃんは「道端で泣きながら土下座されて可哀想になつちゃつたのよねー、犬を拾つた感じかしら？」つて笑つてたけどー！

傍から見たら、凄く間抜けすぎる光景だつたとは思つ。

だつて火の玉サークルにペコペコ半泣きで頭を下げてるんだもんね……土下座。

急加速した火の玉にビビッている私をあざ笑うかのように火の玉は、笑い声や怒鳴り声、恨み辛みの呪いつぽい声を発しながら近づいてくる。

獣の唸り声も、消えては増える火の玉も徐々に大きくなつていつてそれが手を伸ばせば届くような距離に来た時……

(あ、私の人生終わつた)

〔冗談抜きでそう思つた。

近づいてくる悲鳴すら、なんだかもう嘲笑にしか聞こえない。もしくは生贊を前にして喜びまくつてる悪魔的な何かの声だ。

土下座スタイルから開き直つて、ほんやりとその場で正座をした。

あぐりでも書いてやるつかと思つたけど、正座の方がコンパクトなので却下だ。

これでもまだ現世に未練があるので最後まで些細な抵抗をしてやうと思ったのだ。ふふん！

人生短かつたなーとか考えていると、どこからともなく、聞き覚えのある音が耳に飛び込んできた。

控えめではあつたけど、それは確かに聞き覚えのある音。思わず、その場で立ち上がりかけて、人魂が近くにあることを思い出した。

危ない、危ない。

結局、膝立ちの姿勢で落ち着いた私はパツと視線を周囲に巡らせた。

必死に周りを見てみるけど、火の玉しかみえなくて“うわあ”と人事みたいな声が漏れる。

でも、まだ小さな声は聞こえているから、炎の壁のように立ちふさがるソレらの僅かな隙間から必死に探した。

(だあああつ、もーつ！火の玉、ほんとに邪魔くさい！！)

焦りながら一つの音を探す私を嘲笑うよつこ、火の玉のものと思われる声たちが大きくなる。それに比例して獣の唸り声や消えていく火の玉も増えたり、減ったりを繰り返す。

「ツ、ええい！！チカチカチカチ力して田に優しくないツ……ちゅーん！チュン、ちゅん～～！…ビニー？！」

聞こえたのはチツチツチといつチュンの鳴き声だった。

小さくて聞き取りにくかったけど、でも間違いなくチュンの鳴き声だ。

雀の鳴き声の区別するなんて器用な真似ができるとは思わないけど、頭にパツと浮かんだのはチュンの姿で、きっと、チュンの声なんだと思う。

そもそも、雀に知り合いなんてチュンくらいしかいないし。

声を張り上げてチュンを呼び続いていると、手の甲に物凄い痛みが

走った。

……表現するなら、チクツビリツ！って感じ。
一点集中型の痛みだつたよ！
思わず飛び上がつた位だし、絶対血イでてる。
だつてなんかそーゆー痛みだつた。

にしたつて、ちょっとした虐めですか？「」。
私、夢の中とはいえ頑張つてたとおもうんですけども……足りません
んでした？

頑張つて山歩きして、怖い夢見たんだから『褒美位くれてもいいと
思うんだよね。
囲むんなら火の玉じゃなくつてケーキとか大福とかにしてよ、私の
脳みそ！！

痛みを猛烈に伝えてくる手の甲は、じんわりと血が滲んでいるのが見えた。

暗闇だけど、肌が露出してることで血が滲んでいたりと浮き上がりるのでかるい感じで、その血と一緒にブクッとしたものがある。間違いない、血だ。バツチリ出血している。

うう……なんか血を見たら益々（ますます）痛くなつてしまつたんですけど。

「ううん…」

「…………あのね、ハッくんって胸張られても凄く、痛いです」

「あらちちちち、ちゅんちゅんちゅん…」

「うん、じゅん。何言つてるのかわかんないんだ……でも、今度どつかで鳥語講座とか見かけたらやつてみるよ」

ちゅうと、とこりか結構痛いけど可愛いから許す」と云した。

撫で撫でと頭を撫でながら、ふと顔を上げる。

いや、別にここでそういうべきの人魂はどうなったんだひーとか思つたわけじゃないよ！

別に忘れてたわけでもないよ！

「あ、あれ…もしかして私、起きた…？」

自分が起きた自覚がなかつたからビックリした。

多分、起きた自覚がなかつたのは夢と同じくらい真っ暗だったから
だと思つ。

や、流石に周り明るいのにまだ寝てるんだわ~ふふ、みたいな自
体にはならないよ?ホントだよ?!

洒落にならない遭遇2（後書き）

ちょっと尻切れトンボ気味。

むむむ・・・、でも一応“悪夢”はよい終わりです。悪夢は、で
すけど。

ここまで読んでもさうしてあいつがどうぞこましたー次こそ頑張り
ます。

洒落にならない遭遇③（前書き）

今の時期、森で野宿したら確実に凍死します。

By 北海道

起きたのは、わかつた。

でも、それだけです。

夢とほとんど変わらない暗闇なのに、おどりおどりしきあの声も音も聞こえなかつた。

なんだか、静まり返つてゐるのが不気味で仕方なくて無意味にそわそわする。

落ち着かないのはきっと、さつきまでいろんな意味で賑やかだった場所から、突然静まり返つた場所に戻つてきたからだと思つ。

さっきまではあんなに怖かったのに、いや畢竟めてみると今度は現実の方が怖いと感じるんだから変な話だよね。いや、ひとつにしてもこの森 자체が怖いんだけどさ。

なんだよ、自殺の名所って！私救助される確率ものつそいないじゃないか！とかなんとか心の中でブツブツ言いながらチュンを撫でていて、少し驚いた。

「……？チュン、ビー見てるの？」

「……」

「いや、あの、流石にみちよつと切な……あ、れ？」

チュンがじつとある一点を見てこよと云づいて、何気なく視線を向けてみる。

自慢じゃないけど横断歩道は何となく2度見してから渡ります。

その先にあるのは確かに暗闇だった。

真っ暗で、おそらく出でているはずの月の光も届かない陰鬱とした森に光っている何かが見える。

最高級のガラス細工を見るのかもしれない、と一瞬考えた。でも、流石に地上から単独で浮いているガラス細工や宝石は見たことがないから、違うんだろう。

「チヨン、アレはなんかよくわからぬいけど……綺麗だねー」

思わずこぼれ落ちた独り言は、やっぱり独り言で終わった。

チヨンはただ、じつとその赤い綺麗なものを見ている。

私もそれにつられて闇の中に浮かび上がる赤いモノを眺めていると、それがほんの少し近づいてきたような雰囲気を感じ、思わず目をこすつた。

くしゃ、ともくしゃ、とも言えない、生きた草を踏む音が一定の間隔で4回響いて、跡形もなく空気に溶ける。

この、綺麗な赤の持ち主は動物なのだーと、頭のどこかで告げられた。

お告げ体験は初めてですーってそんなお馬鹿なことを行つてくる場合じやなくなつたのは、ほんの数秒前のこと。

いやね、背後にな、なんか、いるっぽいんですねーーーあは、あはははははーーー！

冷や汗と冷や涙（ひやつとして出てくる涙つて感じです。うつかりでちやつたんです、普段は強い子だと思います、私）と悪寒を引き

起こしてくれたのは多分、昨日つづかり何度も目撃してしまった黒い人影。

後ろを確認したわけではないんだけど……奴と出会った時にバビビッ！つと来た感じが似てる。嫌な方向に。

爽快さとは真逆の位置にありそうなこの感覚はそうなんども経験できるようなものじゃないこと位、理解し始めていますとも。現在進行系で経験しちゃってるからね！

黒い影が突如出現する直前、ずっと赤く綺麗なモノを見つめていたチュンが、甲高い、それでいて緊急事態を知らせるような鳴き声を挙げた。

よく、例えで“まるで火がついたように子供がなく”とかあるけど、ソレの鳥バージョン。

（チュンは、教えてくれてたのかな…、もしかして）

体中の羽毛を逆立てて、怖いのかプルプル小さく震えている癖に私より何十倍もちっちゃな体で私を守るように“何か”に向かって鳴き続けている。

なんだかもー、それを見たら悪寒とか恐怖とかそんな感じでもよくなつて、とりあえずこの可愛すぎる生き物を優先的に考えることにした。私には須川さん印のお守りがある。それに、塩だつてある。明日の夜には意地でも着く予定だから、塩だつてちょっとくら

いなら使えるんだよ、大事に使ってたからねー！

「ありがとう、チヨン。」ここに隠れててね…一応、水浴びは下から汗臭くはないと思つけど…居心地悪かつたらぴょーいつて飛んでつてくれてもいいし

「チツ？！チチチチチツーーーー！」

「はーはー、大丈夫だよ。怖いつちゃー怖いけど、チヨンがいるしおちおち死んでらんないよ。まだケーキも大福もお腹いつぱい食べてないし、新しく出来たクレープ屋さんの評価もまだしてないからね」

チヨンを握りつぶさないようこそっと両手で掬い上げて、とりあげず、安全そうな懷（というか服の間）にいた。

少しばかり、乳に鳥独特の爪が食い込んで痛こぢょばしいけど、我慢できないほどでもないしチヨンもチヨンなりに体を落ち着ける位置を見つけたらしい。

「ちゅんー！」

「か、かわええ……もし「」を無事に出られたら「」真撮らせて！
かわいすぎる」

「へ？ああ、そういうえばそうだったね…………？あれ、なんかさつきのいなくなつてない？」

チョンに叱られて視線を戻せば、そこにはもう、なにもいないようだつた。

とうあえず、寝袋から出て、そのまま座り込む。

一通り周りを見たけど、わざわざ「つぐる」感じは全くない。

「見間違い、つて訳じやなわち……ハハ一々。」

変だなー、と感きながら寝袋に潜りついた私の耳に、ぶちゅり、
「じりゅ、という生きしい音が聞こえてきた。

はじめに聞こえてきたのは、何か適度に柔らかいものの纖維を無理やり引き裂いていくような音と骨のように硬い何かに当たつてそれ

が一旦止まる音のよにも聞こえる。

『ぐぐり、と私が生睡を飲むのを確認したように、バリバリと硬いモノを豪快に噛み砕く音が聞こえた。

ぎ ゆ わ あ あ あ あ あ あ あ あ ！

擬音にするなら、多分、これが一番近い。

怒号にも似たものすごい衝撃波のようなものが私がいる一体の空気を震わせた。

無意識に握り締めた寝袋と、胸の間でぶわっと羽毛を逆立てているチョンの存在を感じながら私は、身動きひとつ取れないまま固まっていると、四方八方から……あの、黒いのと同じ気配が現れる。

ひゅっと喉を空気が通つて、私はそれっきり息をひそめる。

かつてないほどに緊張していると今の私なら言い切れる。

黒いのに、バリバリと何かを捕食しているなにかに気づかれないよう必死に気配を消そうと意識する。

心臓の音が頭の奥で聞こえているのに、気配にだけは過敏になつている様な気がした。

何かを食べるような音は、絶え間なく、黒いのが増えるに従つて感覚が短くなつている。

多分、捕食しているなにかは、あの氣味が悪い黒い人影を喰つてゐんだろう。

どんなゲテモノ食いでもアレは食べたいとは思わないと思うんだけど……たぶん、ものつすぐ悪食なのか飢えているのかどちらかだろうと見当をつけた。もちろん、証拠なんてなものない、ただの思い込みだけね！

バリンボリン豪快に骨ごと噛み砕くような音が聞こえてから、どのくらい経つたのかはわからない。

でも、確かに何かが終わったのだと私は気づいた。

それは音が変わったせいでもあるし、黒いのを見た時の悪寒がナリを潜めたからでもある。

ごくり、と乾ききった喉を潤そつと体が無駄な努力を実行したけど唾液なんて出るはずもない。

喉どころか口の中 자체が、カラツカラのサハラ砂漠か鳥取砂丘並に乾燥してるんだから。

はー、はーと自分の浅い、それでいて緊張し切ったような息遣いが耳障りだつた。

米神や背筋を伝づ冷や汗も不快で、明日の朝、歩く前に水浴びを unused 用と心に誓つ。

多分、こんな状態でも私が気を失つたり、気が触れたりしないのはチユンのお陰だ。

自分より小さな生き物の存在があるから、私は自分を保つていられる。…ギリギリで火曜サスペンス劇場の説得景色並みに崖っぷちにいるけども。

ぱた、と何かが落ちる音がする。

パタパタ、と連續してナニカ ……液体が、草の上におちる
ような…… 音が聞こえる。

そして、同時期くらいに耳と意識に飛び込んできたのは、さくつかくつと草を踏む人ではない重さの何かが近づいてくる音だ。

かろうじて手の届く範囲が、つすりぼんやり見える状況でこれは怖い。とても怖い。非常に怖い。

どうしよう。

なんの解決策も浮かばない私は、ただ、冷や汗を流しながらそんなことを考えて

……暗闇に、意識をさらわれた。

これが私にとって人生初となる失神でした。と一ぜん嬉しくない。

洒落にならない遭遇③（後書き）

せ、やつと書き終わった…… | 田田の夜のお話です。

次は三田田の朝！の予定。

あー、早く終わらせたい……！

ここまで読んでください。あつがヒヅケをしました！

P.S.

お気に入りがまた増えていました……び、びびでばびでふーーー（驚

嘆の意）

あの、ほんとにあつがヒヅケこます。が、がんばんべーーー！

洒落にならない肉体労働（前書き）

鳥肉が好きです。

焼肉はホルモンとかタン元が好きです。ふまい。

遠くの方で聞こえる可愛らしい囀りと不釣合すぎる鉄臭さに目を開けた。

ムツとするわけじゃないけど、確かに鼻につくそれに爽やかさとは真逆を行く目覚めを体験した、私はかなり不機嫌だ。

むつすりとふてくされた顔をして、かなり可愛くない顔をしている自覚はあった。

でも、だれも見てないから不細工な顔してもいいと思つんだ、うん。

寝癖でボサボサの髪をなんとなく手櫛で整えつつ、大きな欠伸をしてから、ペットボトルの水を一口飲んでよつやく目が覚めた。口に何か入れないと目が覚めないと中々不便だけど仕方ない。

ぼんやりしたまま、周りを見渡していくと荷物みれの犬の像が乗っていた土台が田に入つた。

そういえば昨日の夜はここで寝たんだつたなーなんて考へていると、ものすゞく近いところからチュンの声が聞こえてきた。
まだ半分は確実に眠つている頭で辺りを見回してみたけど、チュンの姿は見えない。

「チュンー？」

「ちゅんちゅん！」

「相変わらずいい返事なんだけど、どうしてのかさっぱりわかんないんです」

「うひひひあ？！って、あー……そういえば、昨日ソニーに避難した

んだっけ？」

「うだよー」と言わんばかりにドヤ顔をしていのチヨンに苦笑して、胸の間にすっぽり体を埋めていのチヨンを取り出す。私が片手で“むぎゅ”ってやらないことを分かっているのか抵抗はせずに静かに身を任せ、おとなしくしている。

なんか、暖かい塊のチヨンを取り出した御陰でちょっと風を冷たく感じた。

冬には湯たんぽ代わりにいいかもしないけど夏の暑い日にはオススメできなさそう。
・絶対蒸れる。チヨンも暑いだろうしね。

「こよおし、わっぱりする為に川にいくぞーーついでに水浴びと魚の有無を確認して、今日の夜には旅館でおいしいおいしい飯を食べてやるーー。」

「ちゅうあつあつ、ちゅうあつあつ」

「え、チュンは行きたくないの？」

「ちゅんちゅんーー！」

ブンブンぱさばさーと首を横に降つたあと猛烈に羽ばたく彼（彼女？）に慌てた私はとりあえず落ち着けと必死に……雀相手に説得を試みていきました。うう、人間が恋しくなってきた。異文化（？）口ミニニケーション難しい。ほでいーらんげーじは辛^{から}づじて通じる程度です。

暫く人間と鳥の「ミニニケーション（互いにほとんど一方通行）」をすること数分、先にしびれを切らしたのはチュンだった。ふふん、雀よりは忍耐力があるってことだよね！私。

「…ハハハハハハハハ」

少しおだと言わんばかりに田の前で飛んでみせるチヨンの片翼には

昨日巻いた包帯がまかれている。

飛べるなら外してもよさそうだなあ、なんて考えながらおとなしくチヨンへ視線を固定させた。

少しの間、飛ぶ自分の姿を私が田で追っているかどうか確認したら
しいチヨンはパタパタと軽やかに曲を舞う。

地面からおよそ30㌢くらいの高さで羽ばたきを繰り返し、やがて私の死角に静かに着地する。

勿論私も、ぐるりと体をその方向に向けて座り直した。

「…………もしかして、結構前から居た？」

「ちゅん」

呆れたような雀の視線を受けながら、私はよつやく自分とチュン以外の生き物に気づきました。

私の目の前にいるのは灰色の毛色をした、大型犬……のように見える生き物。
目は閉じられていて、呼吸は静かだつたけどお腹の部分が上下しているので生きてはいるらしい。
ここまでならただ眠っているようにも見えるんだけど、そーは問屋が下ろさない。

『いや、あのもうお腹いっぱいです』と言いたくなるような自体が次々に起こってくれるんだ、この森は。間違いなくこの森は手加減といつものをしらないね！

簡単に言つと、このワンコが私が先程まで不快極まりない目覚めを体験した原因でした。

から、赤黒い液体が流れ出ていました。それも、

結構豪快に。

幸い、乾いてはいるみたいだつたけどかなり出血したのは間違いないだろう。

どうするのが一番いいのか、緊急事態に動き出した脳みそを活用して考えてみた。

1 川まで背負つていく

2 川まで横抱きにしていく

3 川まで引きずつてていく

とりあえず、3は却下だ。引きずられる犬が可哀想すぎる。

1か2で迷つたけど、リュックは前にして犬は背中に乗せていくことにした。

川に連れていった後は患部やついでに全身を洗える範囲内で洗つて汚れを落とさないことに、なーんにも始まらない。

綺麗にしたら救急セットを使って、ケガの手当を簡単にする。

勿論、薬はチヨンの片翼の治療に使つた薬草だ。

あの薬草は水辺の近くにしか生えないみたいなので川に運ぶ方がいろいろと便利なんだよね~。

「でも、血がつくのはちょっとアレだな……って、そうか…どうせ私も水浴びするんだし服に血がつかないようにはじめっから脱いでいいんだ。蚊もないみたいだし、かぶれそうな植物はなかつたから大丈夫でしょ」

私の中で、この犬を放つて先に進むという選択肢は何故か浮かばなかつた。

別に特別親切な訳でもないし、優しいわけでもないことくらいは分かつてているつもり。

どこかで見たり聴いたりしたゲームやら漫画やらに出てくる心優しいお姫様やら薄幸そうな美女もしくは美少女なんかを目指しているわけでもないし、なりたいとも思わない。

そりやー、困つていて“私”に助けを求めてくれた人なら、求めてきた相手が好きか嫌いかを判断した上で手を貸すし、一般的に手を差し伸べたほうがいいと判断できるような状況だつたら迷わず手を貸すくらいの人間味はあるとおもう。

とりあえずは善良な一般市民である私がだーれも見ていないこの裏・雲仙岳（とても有名な自殺の名所っていうオプションが付いてるよ！）で犬っぽいモノを助けようと思ったのは、先祖代々私の家はモフモフ好きだったからだ。

育ての親である祖父母曰く、江戸川家の血筋や江戸川家に嫁や婿に

くる人間は代々、甘党でもふもふした動物が好きらしい。

あ、もふもふしてない動物も嫌いじゃないよ！

私にとっての天敵はエギアリにあらず。

ス類や葉虫類の類後に蝶々と蝶だけた

カエ川は素手で未だにつかめるし、蜘蛛たまてあまり大きすぎなければ手で捕まえてポイッと外に放り投げられる。バッタとかコオロギは勿論素手で捕獲が可能だ。

…とじょへは最近掴んでないから微妙なラインだけど、一ツさえ思
い出せば問題なく捕獲可能ですよ？

ぱほほー、いつと服を脱いでリュックの中にしまい、寝袋や出して
いた荷物を収納し終えたらそれを前で背負う感じで準備は完了だ。
いよっしゃ！ いつちょ気合入れていきますかッ！

犬の前足を肩に乗つけて、ぐいっと犬の体の下に自分をねじ込む形で立ち上がる。

一応怪我しているから慎重に…でも素早く、犬のお尻の当たりを手で支え、なんとか犬を背負うことができた。

うーん、昔話で薪を取りにいったおじいさんの気持ちがわかる気がする。

重さで軽い前傾姿勢になるんですね、だから腰が曲がるんですね。わかります、わかりますとも。

えいさほいさと歩く私の頭にチュンが乗る。

実際に重みはほとんど感じないけど、何となく重くなつた気がするのはなんでだらう。…自意識過剰？

「」の森は、少し一般的な…私が知つてゐる森とは違う。
はじめの一回と二回の最初の方は腐葉土とかいろんな人がバツとイメージする森（凄く暗くて不気味だったけど）に似ていたけど、今は苔のように地面全体がモシャモシャしたもので覆われているところが多くなつた。

眠つていた場所は、珍しく背丈の短い芝生のような草が生い茂つて寝やすかつたんだけどね。

川へ近づくほど、大きな岩や小石が多くなつていぐ。
かなり歩きにくいけど、「」なりやむつ意地と根性でたどり着くしかないだろう。

一歩一歩確実に足を踏み出しながら、昨日罠を仕掛けた場所に近いところにワン口を下ろすかとも思つたけど……、よく考えたら今素っ裸だし犬も背負つたままだから「」のまま川の中に入っ込んだほうが早いよね。

「そーなると、リュック下ろして「」のまま川に入れればいいか。チュンは自分で水浴びしてね」

「ちゅんつー」

嬉しそうに鳴いて頭の上から飛んだチュンが川の中にある大きな指に降り立った。

きょろきょろと周囲を見渡したかと思えば、一度大きく鳴いて、嬉しそうに川へ体を突っ込んだ。

なんだつたのかはわからないけど、チュンなりに警戒していたのかもしれない。

それを見ながら、足だけでどつにか靴を脱ぐ。

「（昨日、怖い思いしたばかりだけ……いくら人懐っこい鳥でも警戒するよねえ。ふつーに考えてあればない。あの黒いのがびつちりいたと思うだけでゾッとする通り越してウゾッとする）」

いくら単純な私の脳みそでも、忘れられないものはある。
これまで生きてきた中でもTOP5に入るくらい嫌な思い出して
記憶されちゃってそうだ。

死体の衝撃を上回るね、あれば。

「でも、寝てたのが犬でよかつた。熊だつたら流石にびーしょーもなかつたもん……あれば絶対担いで川まで引きずつてくるのは無理、つてその前に食べられてるかー……ちゅん、あんまりそっちに行くと溺れちゃうよー」

「…」

気持ちよさそうにしていたチヨンに声をかけて私は冷たいと思われる川に入る心構えを終了させた。

ふつ、さつさと洗つて魚の有無を確認しないとお腹すいて倒れちゃうもんね！

足先が川の水に触れて、ヒヤッとした感覚が駆け抜けた。

思わずブルブルってなつたけど背負つたワン口は落とさなかつたし、上出来と言えば上出来だ。

昨日から冷や汗とか脂汗とかかいてるはずだし、今日は今日で目覚めてすぐに肉体労働したから絶対、汚れてる。ふ、人がいなくてよ

かつた…女以前に人としてダメになるところだつた。
川があるんだから水浴びくらいないと何かがダメになる気がする
んだよね。

「（全裸で大型犬背負つて山道歩いてる時点で女なんて捨ててるけどさ。いーんだ、誰も見てないしこれは緊急事態だから。普段はもうちょっと慎ましい…筈だといいな）」

始めは上半身だけにするつもりだったんだけど、結構血がつく範囲が広そだから脱いだんだよね。

あ、靴は履いてるよ！

「この森で、生きてる人と出会わなくつてよかつたとこれほど思つたことはない。

いや…流石にパンツもはいてない状態で人に見られて樹海に住む得体のしれない生き物だとは思われたくないし。

ちょっと前に見たビブリ映画のワンコに育てられた少女でも姫でもなんでもないからね！

後ろから見たら毛皮背負つた何かに見えるかもしないけど…

川の温度に少しづつ慣れていた私はチョンがいる岩へ近づく。あそこは一番深いところから少し離れているけど、私の胸の下から今まで水位があるはずだ。

じゅっぴやつぱと川の中を進む。

藻が生えているらしい川底の石たちは注意しないと滑るけど、気を付けてさえいれば問題ない。

背中に背負っている犬は相変わらず大人しくしてしてくれるのでバランスもなんとか保てている。

急に暴れたりしないか一応は気を付けつつ、流れの穏やかな川をわたりていく。

「ちゅん！」

「ヒーちゃんへーさーと、……」いつかひぐーあるかなー……

「……ちゅん」

とりあえず、背中にいる氣を失つた大型犬をじつやつて岩に乗せ
るかが問題だ。

体力？そんなもの残つてたらとっくにひょいっと乗せてますよ。

洒落にならない肉体労働（後書き）

冬のイベントは、基本的にケーキを食べるためになります。

クリスマス？ そんなの財布が寒々するだけさーー！

……大人になつたなあー……実際に色々な意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334y/>

正し屋本舗へおいでなさい

2011年11月25日23時46分発行